

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第582集

ご りん どう
五輪堂遺跡発掘調査報告書

一般国道342号花泉バイパス道路改築事業関連遺跡発掘調査

2011

岩手県県南広域振興局土木部
(財)岩手県文化振興事業団

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第582集 五輪堂遺跡 正誤表

	誤	→	正
42頁4行目	(北緯39° 52' 40"、東経141° 12' 24")	→	(北緯38° 47' 57"、東経141° 11' 52")
48頁	第23図 遺構変遷図 (古代～中世)	→	第23図 遺構配置図 (古代～中世)
49頁	第24図 遺構変遷図 (近世)	→	第24図 遺構配置図 (近世)
81頁中央	39度52分40秒	→	38度47分57秒
81頁中央	141度12分24秒	→	141度11分52秒

五輪堂遺跡発掘調査報告書

一般国道342号花泉バイパス道路改築事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を越す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、一般国道342号花泉バイパス道路改築事業に関連して平成21年度に実施された一関市五輪堂遺跡発掘調査の調査成果をまとめたものです。今回の調査では、縄文時代の石器、古代の土坑・溝、中～近世の堀・土坑・溝といった遺構・遺物を検出しており、本遺跡が縄文時代から近世に至るまでの生活の痕跡を留めた遺跡であることが判明しました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました岩手県南広域振興局土木部・関土木センター、一関市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成23年1月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 池田 克典

例 言

- 1 本報告書は、岩手県一関市花泉町字五輪堂14-1ほかに所在する五輪堂遺跡の発掘調査成果を収録したものである。
- 2 岩手県遺跡台帳に登録されている遺跡番号と遺跡略号は、以下の通りである。
遺跡番号：OE38-2093 遺跡略号：GRD-09
- 3 今回の調査は、一般国道342号花泉バイパス道路改築事業に伴う事前の緊急発掘調査である。調査にあたっては岩手県南広域振興局土木部と岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課との協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが委託を受け、受託事業として実施した。
- 4 発掘調査対象面積・調査期間・担当者は、以下の通りである。
調査対象面積 4,680㎡
調査期間 平成21年7月1日～10月9日
調査担当者 村田 淳・高橋静歩・佐々木智久
- 5 室内整理期間・担当者は以下の通りである。
整理期間 平成22年1月16日～2月15日
整理担当者 佐々木智久
- 6 本報告書の執筆は、Iを岩手県南広域振興局土木部、I～V・Ⅷと編集を村田が行った。
- 7 野外調査における写真撮影は、村田・高橋が行った。遺物写真撮影については当センター写真技師及び村田が行った。
- 8 基準点測量及び航空写真撮影は、以下の業者に業務委託した。
基準点測量・・・(株)両替測量設計
航空写真撮影・・・東邦航空(株)
- 9 自然科学関連の分析・鑑定及び保存処理は、以下の機関に委託した。
樹種同定(VI-1)・・・古代の森研究会
放射性炭素年代測定(VI-2)・・・(株)加速器分析研究所
木製品・鉄製品保存処理・・・岩手県立博物館
石質鑑定・・・花崗岩研究所
- 10 遺構・遺物実測図の縮尺は下記の通りであり、各国版中にスケールを付している。
遺 構 土坑…1/40、堀…平面図1/200・断面図1/80
溝・柱穴…分測図(平面図)1/100または1/150・断面図1/40
遺 物 土器・陶磁器・礫石器…1/3、刮片石器…2/3、鉄製品…1/2
木製品…1/3・1/4、石製品…1/4
遺物写真図版の縮尺は統一せず、器形・文様の特徴が認識できる程度まで拡大している。
- 11 発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の方々にご指導・ご助言を賜った。(五十音順、敬称略)
柴垣勇夫、高原弘征、安井俊則、一関市教育委員会
- 12 今回の調査成果は、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第571集『平成21年度発掘調査報告書』で公表しているが、本書の記載内容が優先する。
- 13 調査で得られた一切の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目 次

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の立地・環境	
1 遺跡の概要	2
2 地理的環境	2
3 周辺の遺跡	4
III 調査の方法	
1 野外調査の方法	7
2 調査経過	9
3 室内整理の方法	9
IV 検出遺構	
1 調査区の概要	11
2 土坑	12
3 堀	17
4 溝	19
5 柱穴	29
V 出土遺物	
1 土器	33
2 陶磁器	33
3 木製品	34
4 石器・石製品	34
5 金属製品	38
VI 自然科学分析	
1 木製品樹種同定	40
2 放射性炭素年代測定 (AMS測定)	42
VII 調査のまとめ	45
1 縄文時代	45
2 古代～中世	45
3 近世～近代	46
報告書抄録	81

図版目次

第1図	遺跡の位置	1	第14図	溝・柱穴分割図⑤	25
第2図	調査区の位置と周辺の地形	3	第15図	溝・柱穴分割図⑥	26
第3図	周辺の遺跡	5	第16図	溝断面図③	27
第4図	グリッド及び遺構配置図	8	第17図	溝・柱穴分割図⑦、溝断面図④	28
第5図	基本順序	11	第18図	溝断面図⑤	29
第6図	1～3号土坑	15	第19図	出土遺物(1)	35
第7図	4～10号土坑	16	第20図	出土遺物(2)	36
第8図	1号堀	18	第21図	出土遺物(3)	37
第9図	溝・柱穴分割図①	20	第22図	出土遺物(4)	38
第10図	溝・柱穴分割図②	21	第23図	遺構配置図(古代～中世)	48
第11図	溝断面図①	22	第24図	遺構配置図(近世)	49
第12図	溝・柱穴分割図③、溝断面図②	23	第25図	1号堀の変遷模式図	50
第13図	溝・柱穴分割図④	24			

表目次

第1表	周辺遺跡一覧	6	第6表	陶磁器観察表	39
第2表	遺構名変更一覧	10	第7表	木製品観察表	39
第3表	溝計測表	30	第8表	石器・石製品観察表	39
第4表	柱穴計測表	32	第9表	金属製品観察表	39
第5表	土器観察表	38			

写真図版目次

写真図版1	調査区の状況(1)	53	写真図版15	22～24・28号溝	67
写真図版2	調査区の状況(2)	54	写真図版16	25～27号溝	68
写真図版3	調査区の状況(3)、基本順序、 1・2号土坑	55	写真図版17	29～31号溝	69
写真図版4	3～6号土坑	56	写真図版18	29・32～34号溝	70
写真図版5	7～10号土坑	57	写真図版19	35・36号溝	71
写真図版6	1号堀(1)	58	写真図版20	37～40号溝	72
写真図版7	1号堀(2)	59	写真図版21	39～42号溝	73
写真図版8	1～4号溝	60	写真図版22	43～45号溝	74
写真図版9	3～5号溝	61	写真図版23	46～49号溝	75
写真図版10	6～9号溝	62	写真図版24	柱穴(1)	76
写真図版11	10・11・14号溝	63	写真図版25	柱穴(2)、その他	77
写真図版12	12・13・15・16号溝	64	写真図版26	出土遺物(1)	78
写真図版13	17・18号溝	65	写真図版27	出土遺物(2)	79
写真図版14	19～21号溝	66	写真図版28	出土遺物(3)	80

I 調査に至る経過

五輪堂遺跡は、「道路改築事業花泉バイパス」工事に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

一般国道342号は、秋田県横手市を起点とし、奥羽山脈栗駒山（須川岳）を越え岩手県一関市を經由し宮城県登米市に至る総延長約160kmの幹線道路である。また、岩手県内陸部と宮城県沿岸部を最短で結び、一般国道45号や整備中の三陸縦貫自動車道へのアクセス路となり、産業・経済・観光そして文化交流に重要な役割を担った路線である。

事業対象箇所の花泉町市街地は道路幅員が狭く歩道が無い等直角クランクがあるなど交通安全上の問題を多数抱えており、これらの諸問題を解決するためバイパス工事により整備を行っているものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、岩手県南広域振興局一関総合支局土木部（現岩手県南広域振興局土木部）から平成18年10月16日付一総土第516号「道路改築事業実施計画における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」により岩手県教育委員会に対し試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は平成18年12月12日に試掘調査を実施し、工事に着手するには五輪堂遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成18年12月20日付教生第1318号「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により土木部へ回答してきた。

その結果を踏まえて県土木部では岩手県教育委員会と協議し、調整を受けて平成21年7月1日付で財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

（岩手県南広域振興局土木部）



第1図 遺跡の位置

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の概要

五輪堂遺跡は、岩手県一関市花泉町字五輪堂地内に所在し、JR東北本線花泉駅から南東へ約3km、金流川右岸の河岸段丘上に位置する（第2図）。遺跡の所在する五輪堂地内は、現在湧津八幡神社に安置されている鉄製五輪塔地輪（昭和55年国重要文化財に指定）が出土したとされる地であり、出土したと伝えられる地点の付近には烏居が建立されている。遺跡内は、現在は水田として利用されており、繰り返し行われた圃場整備事業によって大幅に地形が改変されている。

本遺跡では、平成14年度に花泉町教育委員会と（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（以下、県埋文センター）によって発掘調査が実施されている。県埋文センターは遺跡範囲の南東側を調査しており、平安時代の堅穴住居3棟をはじめ中世の堀、中～近世の墓などの遺構、土師器・須恵器、常滑窯陶器、永楽通宝、下駄などの木製品を検出している。花泉町教育委員会は遺跡範囲の中央及び東側を調査しており、中世の溝・土坑などの遺構、常滑・瀬美窯陶器、中世の輸入陶磁器・国産陶器、寛永通宝や木製品などを検出している。前述の通り圃場整備による地形改変によって遺構の遺存状況は両調査区とも良くなかったが、縄文～近世にわたる遺構・遺物を検出している。また、鉄製五輪塔の建立年代（13世紀後半）に近い12～13世紀代の遺物も出土しており、鉄製五輪塔の存在も含めて本遺跡ではこの時期に祭祀行為などを行っていたことを推定させる。

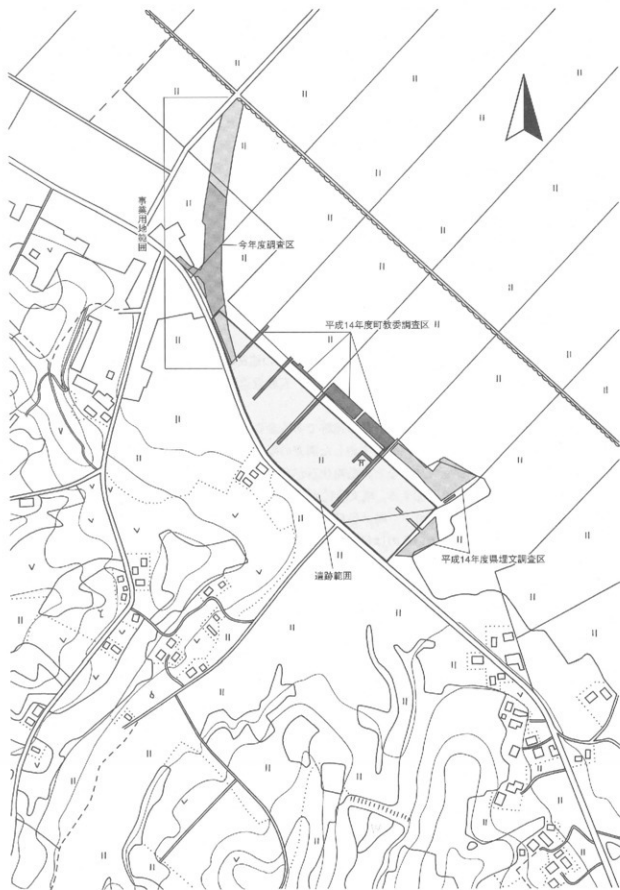
2 地理的環境

(1) 遺跡の位置

五輪堂遺跡の所在する一関市は、岩手県の南端に位置しており、南は宮城県、西は秋田県と接している。現在の一関市は、平成17年9月20日に一関市、西磐井郡花泉町、東磐井郡大東町・千厩町・東山町・室根村・川崎村の1市4町2村が合併して誕生した。市域は東西約63km、南北約46km、総面積は1,133.10km²で、これは宮古市（平成22年1月1日に宮古市と下閉伊郡川井村が合併）の1,259.89km²に次ぐ県内第2位の規模である。土地の利用状況は、総面積のうち約56%が山林、次いで約12%が水田、約7.0%が畑となっており、県内では比較的農地の割合が高い。人口は125,818人（平成17年国勢調査）で、県内では盛岡市・奥州市に次いで多い。一関市のなかでも花泉町は、東は東磐井郡盛岡町、南は宮城県登米市、西は宮城県栗原市と接しており、市域の最南端に位置する県境の町である。昭和30年代に7村（金沢・花泉・老松・日形・湧津・油島・永井）が合併して誕生した町で、総面積は126.83km²、人口は15,346人（平成17年国勢調査）である。

(2) 地形・地質

北上・阿武隈両山地を結ぶ山地の列と奥羽山脈の間の低地帯には、ほぼ南北方向の丘陵地と平野の交互配列がみられる。花泉町を含む一関市付近は丘陵の発達する地域で、いわゆる磐井丘陵が北側の北上盆地と南側の仙台平野とをへだてて発達し、しかも北上山地の西縁部に接している。このような地形発達の背景には地盤運動の影響が考えられ、北上盆地を南下してきた北上川の流路が盆地南端部の一関市狐禅寺地区で東方に向きを変えた後、北上山地西縁部の古生層分布地帯の中に、北から南へ



第2図 調査区の位置と周辺の地形

の順にいわゆる狐禪寺峡谷・大泉峡谷（田辺1952）を形成しているのもその反映であろう。これらの峡谷は、現在の丘陵背面に基づいて復元される過去の平坦な地形面が解析されて以後の段丘形成期を通じて、下流側から上流側へ向かって段丘地形形成のための基準面支配が及ぶ際の通路となった。

磐井丘陵を開析した古磐井川と古金流川はそれぞれ、狐禪寺・大泉両峡谷からなる峡谷部の北端と南端で古北上川に合流しながらその流域に段丘地形を形成し、現在の水系を出現させた。

北上川中流沿岸の模式的な段丘区分（中川ほか1963）に従うと、今回の調査地点を含む五輪堂遺跡をのせている花泉段丘は金ヶ崎段丘に対比される。金流川は、宮城県栗原市栗原町付近を源とし、遺跡北西の花泉町花泉湯の尻で有馬川と合流、さらに下流の花泉町日形館ヶ崎で北上川に注ぐ一級河川である。五輪堂遺跡は、金流川と有馬川が合流する地点から約2km下流の右岸部にあり、金流川によって形成された段丘上に立地している。

遺跡周辺の地質は、新生代新第三紀以降に形成されたもので、その地質は古第三紀までに形成された基盤を埋積し、主に凝灰岩・シルト岩・砂岩・礫岩等から成る。地層は、下位より石越安山岩、下黒沢層、巖美層、有賀層、油島層、金沢層、真滝層、花泉層を含む段丘堆積物で構成されている。

3 周辺の遺跡

五輪堂遺跡の所在する一関市花泉町内では、現在約150の遺跡の存在が確認されているが（第3図）、発掘調査が実施されている遺跡は少ない。本節では、五輪堂遺跡周辺に所在する遺跡を中心に時代毎に代表的な遺跡についてみていきたい。

まず最古の遺跡としては後期旧石器時代の遺跡である金森（花泉）遺跡（10）がある。金森遺跡では、昭和30年に東北大学古生物学教室が実施した調査の際に約2万年前のハナイズミモリウシ・ヘラジカ・オオツノシカ・ナウマンゾウなどの動物化石が多量に出土している。

縄文時代になると遺跡数は増加する。縄文時代の遺跡としては内陸性の貝塚が多く、貝取貝塚（63）白浜貝塚（86）・石崎貝塚（100）・瀧ノ巣貝塚（104）・高倉貝塚（111）などが確認されている。このうち発掘調査が実施されているのは貝取貝塚で、岩手大学・早稲田大学・東京大学による4次にわたる発掘調査によって縄文時代中期中葉～弥生時代に属する土器・石器・土偶・土製品・骨角器・貝類や魚類などの動物遺存体・32体分の埋葬人骨などが出土している。その他、分布調査の際に石崎貝塚では中期、高倉貝塚で中～晩期の土器片や石器が採集されている。

集落遺跡の調査事例としては、中期中葉に属する堅穴住居跡が45棟検出された下館銅屋遺跡（9）、中期中葉～後期前葉の土器・石器が出土した四日市場遺跡（20）、晩期の住居跡、早期～晩期の土器・石器・骨角器・土偶・巻貝形土製品などが出土した日形地区どうじゃ森（中神）遺跡などが挙げられる。

弥生時代の遺跡としては、前述した貝取貝塚とどうじゃ森遺跡が挙げられる。貝取貝塚では、前期の砂沢式土器が出土している。どうじゃ森遺跡では東北大学が実施した調査の際に縄文時代晩期～弥生時代前期の土器・骨角器、土偶などが出土している。

古墳時代の遺跡としては、永井地区に終末期古墳群と考えられる杉山古墳や尼塚古墳があり、杉山古墳で5基の古墳が調査されている。しかし、集落遺跡などは現在のところ確認されていない。

平安時代の遺跡は、それ以前に比べて大幅に増加しており、例えば下館銅屋遺跡では堅穴住居跡、中村城跡（19）では堅穴住居跡・水田・堀が検出されている。その他にも分布調査で土師器・須恵器が採集されている遺跡は多い。



第3図 周辺の遺跡

中世の遺跡としては城館跡・祭祀跡・集落があるが、城館遺跡が最も多く、過去に実施された分布調査では花泉町域で48の城館が記録されている。このうち高倉城(109)・菊明館(25~29)など縄張り図が作成されているものもあるが、発掘調査が実施されたものは中村城跡のみである。中村城跡の調査は花泉町教育委員会と県埋文センターによって実施されており、城を巡る堀・橋跡などが検出されている。祭祀跡としては塚や石祠があるが、発掘調査が実施されたものとしては金流川を挟んで五輪堂遺跡の対岸の丘陵上に位置する王壇遺跡(24)のみである。

近世の遺跡としては、江戸時代中期の製鉄炉が検出された守沢遺跡(32)などがあるが、中世に比べて遺跡数が少なくその内容は判然としない。

Ⅲ 調査の方法

1 野外調査の方法

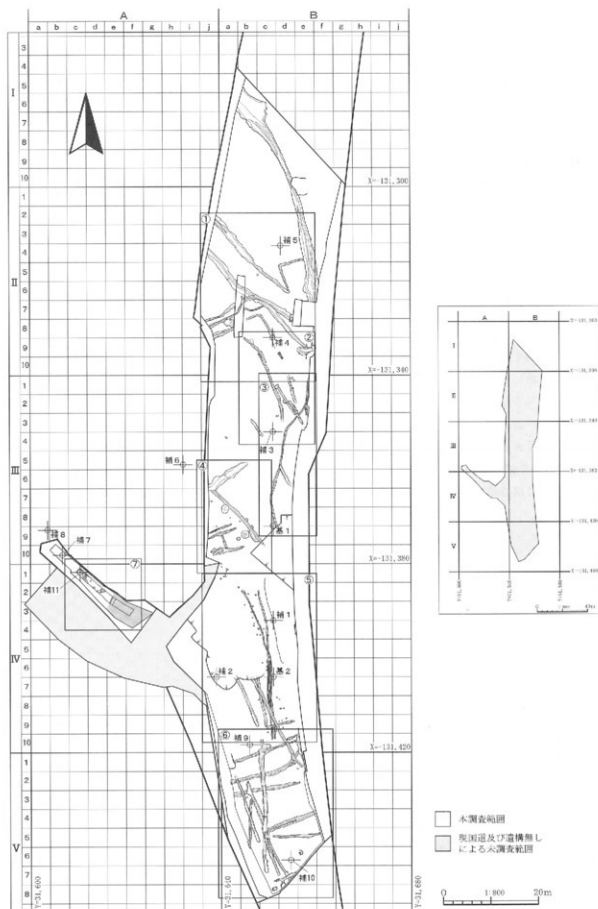
(1) グリッドの設定

今回の調査では、現地に打設した基準点をもとに調査区全域をカバーできるようにグリッドの設定を行った(第4図)。具体的には、 $X=-131,260.000$ 、 $Y=31,600.000$ の座標(世界測地系の平面直角座標系第X系)を基点として一辺40×40mの正方形グリッド(大グリッド)を設定、さらに各辺を10等分して4×4mの小グリッドを設定した。グリッドの呼称は、北西隅を基点として大グリッドは北から南へⅠ~Ⅳ、西から東へA~D、小グリッドは北から南へⅠ~10、西から東へa~jとし、小グリッドは「IA5b」などと呼称している。なお、今回の調査では遺構図面の作成に実測用ソフト「遺構くん」を使用したこと、及びグリッドで遺物の取り上げが必要な包含層が存在しなかったことから、現地には基準点6点(基1・2、補1~4)と実測用の任意点7点(補5~11)を打設した。

基1	$X=-131,372.000$	$Y=31,651.000$	$H=18.358m$
基2	$X=-131,404.000$	$Y=31,651.000$	$H=18.660m$
補1	$X=-131,392.000$	$Y=31,651.000$	$H=18.356m$
補2	$X=-131,404.000$	$Y=31,639.000$	$H=19.066m$
補3	$X=-131,352.000$	$Y=31,651.000$	$H=18.408m$
補4	$X=-131,332.000$	$Y=31,651.000$	$H=18.583m$
補5	$X=-131,312.532$	$Y=31,652.741$	$H=18.677m$
補6	$X=-131,358.984$	$Y=31,632.108$	$H=21.604m$
補7	$X=-131,378.124$	$Y=31,606.654$	$H=23.072m$
補8	$X=-131,372.812$	$Y=31,603.594$	$H=23.248m$
補9	$X=-131,418.353$	$Y=31,645.944$	$H=19.134m$
補10	$X=-131,442.811$	$Y=31,654.566$	$H=19.267m$
補11	$X=-131,381.737$	$Y=31,610.423$	$H=22.689m$

(2) 精査の方法および遺構の記録

調査に先立って調査区内の雜物撤去を行い、続いて遺構の有無を確認するために数箇所にトレンチを設定して人力で試掘を行った。試掘の結果、広範囲でI層(表土・盛土)が厚く堆積していることが確認されたことから、調査の迅速化と人力掘削量の軽減を図るため、調査員監督の下、重機(バツ



第4図 グリッド及び遺構配置図

クホー)によって遺構検出面付近までI層を掘削し、その後人力で遺構検出を行った。

検出した遺構には釘やスプレーを使ってマーキングし、一部の遺構については検出状況の写真撮影を行った。なお、野外調査時の遺構名には主にSD・SKなどの略号を使用しているが、最終的には室内整理の段階で第2表のように遺構名を変更している。

遺構の掘り下げは土坑・柱穴は2分法、堀・溝は数箇所にベルトを設定し、土層観察を行いながら進めた。なお、プランや新旧関係が不明な場合は適宜サブトレンチを設定して層位確認を行った。

遺構の記録については、完掘、土層断面、遺物出土など状況に応じて写真撮影と実測図の作成を行っている。実測図は、実測用ソフト「遺構くん」((株)Cubic社製)を用いて数値データを収集し、それをもとにパソコン上で図化している。

遺構の写真撮影には、6×7cm判カメラ(モノクロ)とデジタルカメラ(キャノン社製一眼レフタイプ、1580万画素)を使用した。6×7cm判は記録保存、デジタルカメラは報告書作成及び広報・普及を目的として撮影しているが、基本的に6×7cm判で撮影したものについてはデジタルカメラでも同・カットの撮影を行っている。

2 調査経過

野外調査は、平成21年7月1日から10月9日まで実施した(当初予定は9月30日)。調査開始当初は調査区南端と南西調査区の小屋や畑地が移転しておらず、加えて南西調査区の半分以上は現在の国道342号線であり発掘調査に着手できなかった。その為、7月は南端を除く本道部分調査区約3,200㎡から調査を開始した。

8月5日に岩手県南広域振興局、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課、当埋蔵文化財センターの3者により現地協議を行った。具体的には移転作業用の重機進入路を確保する為に8月第4週までに調査区北東側を調査終了して引き渡すこと、その後委託者側で移転工事を9月第1週から調査区南端と南西調査区の調査を行うことで調整を行った。その為、8月21日に調査区北東側約600㎡を引き渡し、委託者側で移転工事を開始した。しかし、工事が難航したことにより9月第1週からの調査開始が不可能となった。また、8月後半には調査区北端で検出された堀(1号堀)が調査区外へと延びていくことが確認されたことから、全体の状況を考慮して9月前半(1~13日)に野外調査の中断期間を設けることとなった。その為、8月31日までに調査区中央の航空写真撮影、調査区及び周辺周辺の養生を行って野外調査を一且中断した。

9月14日に野外調査を再開、移転が終了した調査区南端と南西調査区の調査を開始した。また、1号堀については県生涯学習文化課との協議の結果、調査区外(事業用地範囲内)に重機でトレンチ掘削を行いながら方向を確認し、堀跡が確認された範囲を調査範囲に含めて精査を行うこととなった。9月28日に終了確認を実施、10月9日に資材を撤収して野外調査を終了した。

3 室内整理の方法

(1) 遺構

遺構図面は、実測用ソフト「遺構くん」((株)Cubic社製)で収集した数値データをもとにデジタルデータ化している。本報告における遺構図版作成の具体的な作業工程は以下の通りである。

①平面図は全体図から近隣に位置するグリッド及び方位とともにコピーし、「遺構くん」新規ファイルに貼り付ける。断面図は数値データファイルから関連する数値データをコピーし、平面図と同じ

「遺構くん」ファイルに貼り付ける。

②合成用基準線（断面図作成ライン）が水平になるように平面図をグリッド・方位とともに回転し、断面図と合成して修正図を作成する。

③修正図が完成した後、テキストデータとして入力した土層記註を同一ファイル上に貼り付け、さらに当センターの版面（縦24.0×横16.0cm）に収まるように「遺構くん」ファイル上でレイアウトを行う。また、あわせて平面図を合成前の角度に戻し、全体図に貼り付けて遺構配置図も作成する。

以上の工程を経て作成した図面は全てグラフィックソフトAdobe Illustrator CS2を用いて網掛けなどの処理と配置の調整を行って全体の統一を図り、AI形式で保存したファイルを完成品として印刷業者に納入した。

(2) 遺 物

遺物の処理は、洗浄から開始した。土器・陶磁器類は水洗・乾燥後に土師器・須恵器・陶磁器に選別し、日付順に袋番号を付しながら破片数と重量を計測した。その後、土器は遺跡名と袋番号を記註し、接合・復元作業を行った。なお、今回出土した土器・陶磁器類は全て器形の復元できない破片資料であったため、遺構内外問わず特徴的なものについて登録・実測・拓本を行った。

石器・石製品については計量後、器形・用途が判別できるものを中心に選別して登録・実測を行った。鉄製品はX線透過写真撮影を行って遺存状況を確認しながら錆落としと実測を行い、破損防止のために保存処理作業を委託している。

上記の作業の後、実測を行ったものについてはトレースを行い、版下を組んで遺物図版を作成した。

第2表 遺構名変更一覧

土 坑		溝		溝	
新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名
1号土坑	SK 05	6号溝	SD 33	28号溝	SD 07
2号土坑	SK 04	7号溝	SD 16	29号溝	SD 06 a
3号土坑	SK 07	8号溝	SD 19	30号溝	SD 05
4号土坑	SK 02	9号溝	SD 13	31号溝	SD 06 b
5号土坑	SK 08	10号溝	SD 18	32号溝	SD 01
6号土坑	SK 06	11号溝	SD 17	33号溝	SD 27
7号土坑	SK 01	12号溝	SD 15	34号溝	SD 28
8号土坑	SK 03	13号溝	SD 14	35号溝	SD 08
9号土坑	SK 11	14号溝	SK 09	36号溝	SD 44
10号土坑	SK 10	15号溝	SD 34	37号溝	SD 29
		16号溝	SD 12	38号溝	SD 39
		17号溝	SD 11	39号溝	SD 41
		18号溝	SD 24	40号溝	SD 40
		19号溝	SD 10	41号溝	SD 46
		20号溝	SD 23	42号溝	SD 48
		21号溝	SD 22	43号溝	SD 47
		22号溝	SD 31	44号溝	SD 43
		23号溝	SD 32	45号溝	SD 42
		24号溝	SD 09	46号溝	SD 45
		25号溝	SD 04	47号溝	SD 38
		26号溝	SD 02	48号溝	SD 36
		27号溝	SD 03	49号溝	SD 37

壘	
新遺構名	旧遺構名
1号壘	SD 35

溝	
新遺構名	旧遺構名
1号溝	SD 30
2号溝	SD 21
3号溝	SD 25
4号溝	SD 20
5号溝	SD 26

Ⅳ 検出遺構

1 調査区の概要

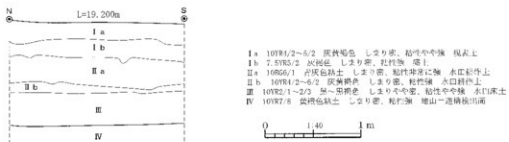
今回の調査区は、一門市花京町湧津字五輪堂14-1ほかに所在する（第2・4図）。調査前は休耕田、畑地、駐車場であり、昭和30年代以降に圃場整備に伴う地形改変が繰り返し行われている。なお、第2図の通り今回の調査区は厳密には五輪堂遺跡の範囲内には含まれていないが、平成18年度に岩手県教育委員会生涯学習文化課が実施した試掘調査によって新たに遺跡範囲に含められており、今回はこの部分を五輪堂遺跡の一部として調査を実施した。

調査区は、バイパス本道部分及び現国道342号線からの取り付け道路にあたる部分で、当初は4,572㎡が調査対象範囲であった。しかし、調査範囲に含まれていた現国道部分及び調査範囲外に延びていた1号堀の取り扱いを協議した結果、最終的には4,680㎡が調査対象範囲となり、土坑10基、堀1条、溝49条、柱穴65個を検出した。

遺跡の基本層序はⅣB4eグリッドで作成した（第5図）。圃場整備による地形改変の影響により、各地点で盛土や水田耕作土が厚く堆積していることが確認された。旧地形が残存している部分はほとんど無く、遺構は全てⅣ層上面で検出している。検出面の標高は17.5～21.0mである。

調査区は全域で擾乱が著しく、水田耕作の痕跡の他、産業廃棄物を埋めたゴミ穴も多量に見つかっている。また、調査区西壁付近には水道管が埋設されており、土地改良区に問い合わせたところ現在も使用中であるとの回答を得た。なお、周辺を試掘した結果、水道管は遺構底面より下位まで掘り込まれて埋設されていることが判明したことから、掘削はこの水道管の直近までとして水道管の直下は掘り下げていない。

南西調査区については大半が現在の国道であること、現地表面からの掘削深度が2.5m以上になることから作業の危険性があると判断された。その為県生涯学習文化課と協議を行い、南西調査区については掘削可能な範囲のみ精査を行い、現国道部分については工事段階での立会調査で対応することとなった。調査を行った範囲では溝2条と柱穴4個を検出したが、ⅣA2eグリッドから東側はバイパス本道部分に向かって傾斜する旧河道であった。この旧河道中からは遺構・遺物ともに検出されなかったことから、これより東側は掘削の必要は無いと判断し、写真撮影等終了後埋戻しを行った。



第5図 基本層序

2 土 坑

10基検出した。

1号土坑 (第6図、写真図版3)

<検出状況> II B 8 a グリッドに位置し、褐灰色の不整形な楕円形プランとして検出した。北側が3号溝と接しているが、削平のため新旧関係は不明である。

<形状・規模> 東側を試掘トレンチによって壊されているが、平面形は南辺が窪んだ空豆形である。上面の残存規模は、2.23×1.55mである。断面形は本来皿形であったと思われるが、根椀乱もあって凹凸が著しい。深さは最も深い南壁側で8cmである。

<堆積土> 砂質土と粘質土の混合土で、3号溝堆積土より色調は明るい。

<出土遺物> 出土していない。

<性格・年代> 出土遺物が皆無なため性格・年代は不明である。

2号土坑 (第6図、写真図版3)

<検出状況> II B 9 e グリッドに位置し、褐灰色の楕円形プランとして検出した。北壁で4号溝と接しており、これを壊す形で掘削されている。

<形状・規模> 東西方向に長軸をとる楕円形プランの上坑であるが、東側が後世の水路敷設の際に壊されている。上面の残存規模は3.40×1.76mである。底面は平坦に整えられており、平面形はやや不整形な長方形である。断面形は長軸・短軸方向とも逆台形を基調とするが、壁面中位付近で角度が変化し、上面はハの字状に開く。深さは最も深い東壁付近で58cmである。

<堆積土> 褐灰色系の粘質土が堆積しており、12層に細分した。このうち上位の6層にはIV層ブロックが多量に混入しており、堆積状況から東側から窪みを埋めるために人為的に埋められた土と考えられる。7層以下は壁面崩落土あるいは周辺からの流れ込みと考えられる黄色系の粘土であり、6層までと異なり混和物はほとんど認められない。

<出土遺物> 東側の椀乱から近世陶磁器が出土しており、そのうち描鉢1点を掲載した(1)。

<性格・年代> 椀乱土からの出土ではあるが、近世陶磁器が出土していること、4号溝を壊していることを考慮すると、本遺構は近世に掘削されたものと考えられる。形状的には墓の可能性も考えられるが、それを示す遺物などは出土していないため不明である。

3号上坑 (第6図、写真図版4)

<検出状況> III B 1 c グリッドに位置し、褐灰色の円形プランとして検出した。12号溝と重複関係にあり、これを壊す形で掘削されている。

<形状・規模> 平面形は円形で、上面規模は1.10×0.66mである。断面形は皿形で、深さは最も深い中央部分で10cmである。

<堆積土> 褐灰色～にぶい褐色の砂と粘土の混合土の単層である。

<出土遺物> 出土していない。

<性格・年代> 重複関係から12号溝より新しい土坑と判断できるが、出土遺物が無いため年代は不明である。また、性格についても不明である。

4号土坑（第7図、写真図版4）

<検出状況> IV B 8 a グリッドに位置し、黒褐色の円形プランとして検出した。19号溝と重複関係にあり、北東側の一部が19号溝によって壊されている。

<形状・規模> 平面形は円形で、上面規模は1.82×1.52mである。断面形は楕円状で、深さは最も深い中央部で28cmである。

<堆積土> 2層に細分した。上位は黒褐色、下位は褐灰色の粘土で後述する7号土坑と非常に類似している。

<出土遺物> 土師器が6.3g出土しているが、細片のため図示できなかった。

<性格・年代> 重複関係から19号溝より古い土坑と判断できる。また、堆積土の類似性から中世末期に属すると思われる7号土坑と同時期の可能性がある。ただし、性格については不明である。

5号土坑（第7図、写真図版4）

<検出状況> IV B 8 b グリッドに位置する。検出面はIV層で、褐灰色の円形プランとして検出した。19号溝と重複関係にあり、南西側が19号溝によって壊されている。

<形状・規模> 平面形は円形で、残存する上面規模は0.67×0.55mである。断面形は皿形で、深さは最も深い中央部で7cmである。

<堆積土> 褐灰色土とIV層崩落土の混合土であり、自然堆積と考えられる。また、一定期間滞水していたと考えられるため粘性が非常に強い。

<出土遺物> 出土していない。

<性格・年代> 重複関係から19号溝より古い土坑と判断できるが、遺物が出土していないため詳細な年代については不明である。また、性格についても不明である。

6号土坑（第7図、写真図版4）

<検出状況> IV B 9 b グリッドに位置し、褐灰色の円形プランとして検出した。19号溝と重複関係にあり、南西側が19号溝によって壊されている。

<形状・規模> 平面形は円形で、残存する上面規模は0.75×0.41mである。断面形は逆台形を基調としているが、根の浸食により凹凸が著しい。深さは10cm前後である。

<堆積土> 褐灰色粘土とIV層崩落土が堆積していた。自然堆積と考えられる。

<出土遺物> 出土していない。

<性格・年代> 重複関係から近世に属する19号溝より古い土坑と判断できるが、遺物が出土していないため詳細な年代については不明である。また、性格についても不明である。

7号土坑（第7図、写真図版5）

<検出状況> IV B 9 b グリッドに位置している。重機による掘削中に常滑窯産陶器破片（2）が出土したため、周辺を掘り抜けたところ黒褐色の円形プランとして検出された。他遺構との重複関係は無く、単独で存在する。

<形状・規模> 平面形は円形で、上面規模は1.60×1.55mである。断面形は楕円状に近い逆台形で、底面から壁面への屈曲は緩やかである。深さは最も深い中央部で34cmである。

<堆積土> 黒褐色～褐灰色の粘質土で、泥和物の割合をもとに3層に細分した。基本的に下位層ほど泥和物が少なくなる。各層の境界は非常に漸移的であり、周辺からの流れ込みによる自然堆積の可

能性が高い。

<出土遺物> 土師器32.7g、須恵器11.0g、陶磁器65.3g、磨石1点が出土しており、このうち陶磁器と磨石を各1点掲載した(2・3)。土器・陶磁器は1・2層の上位、磨石は底面直上から出土している。

<性格・年代> 堆積土上位から13~14世紀代と考えられる常滑窯産陶器が出土しているが、3層から採取した炭化物の年代測定結果が 330 ± 30 yrBPであることを考慮すると、本遺構は中世末期~近世初頭に埋没したものと考えられる。なお、性格については不明である。

8号土坑(第7図、写真図版5)

<検出状況> VB8aグリッドに位置し、褐灰色の円形プランとして検出した。他遺構との重複関係は無く、単独で存在する。

<形状・規模> 平面形は円形で、上面規模は 0.80×0.62 mである。東壁が失われているが、断面形は皿形であったと考えられる。深さは10cm前後であるが、根の浸食による凹凸が著しい。

<堆積土> 褐灰色粘土の単層で、7号土坑の1層に類似している。

<出土遺物> 出土していない。

<性格・年代> 重複関係及び出土遺物が無いため年代は不明である。また、性格についても不明である。

9号土坑(第7図、写真図版5)

<検出状況> VB6eグリッドに位置し、褐灰色の不整形プランとして検出した。P54と隣接するが、直接的な重複関係は無い。

<形状・規模> 平面形は不整な楕円形で、上面規模は 0.92×0.60 mである。断面形は皿形で、深さは最も深い中央部で8cmである。

<堆積土> 褐灰色土の単層である。また、酸化鉄を多く含むことから一定期間滞水していた可能性がある。

<出土遺物> 土師器が6.5g出土しているが、細片の為図示することができなかった。

<性格・年代> 土師器が出土していることから古代以降に埋没したものと考えられるが、詳細な年代と性格については不明である。

10号土坑(第7図、写真図版5)

<検出状況> VB8cグリッドに位置し、褐灰色の楕円形プランとして検出した。他遺構との重複関係は無く、単独で存在する。

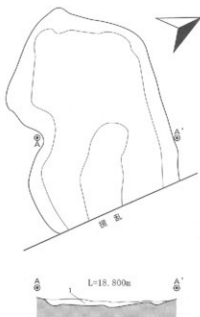
<形状・規模> 平面形は南辺の中央部が凹む空豆形で、上面規模は 1.10×0.70 mである。断面形は逆三角形で、最も深い北壁付近で15cmである。西壁付近に 0.43×0.38 mの小穴があるが、堆積土が同じであることから、一連のものと考えられる。

<堆積土> 褐灰色粘土とIV層崩落土が堆積していた。

<出土遺物> 出土していない。

<性格・年代> 重複関係及び出土遺物が無いため年代は不明である。また、性格についても不明である。

1号土坑



1号土坑

1 7.5YR5/1 黒灰色～5/3に赤い褐色 砂質土と粘質土の混合土 炭化灰30%含む

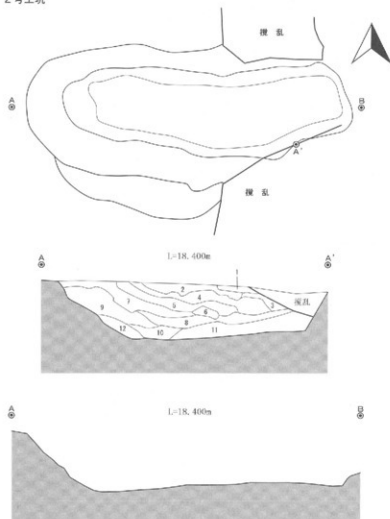
3号土坑

1 10YR5/1～6/1 黒灰色 しまりやや礫、粘性やや強 炭化灰30%、IV層ブロック5%含む

3号土坑



2号土坑



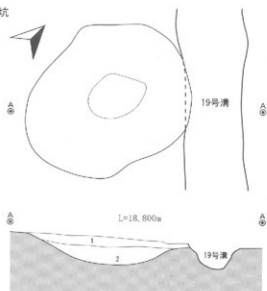
2号土坑

- 1 10YR4/1 黒灰色 φ5cm以上の7.5Y7/1灰白色及び2.5Y7/4黄褐色粘土を多量に含む
 - 2 10YR4/1 黒灰色 しまりやや礫、粘性強 φ5～20mmの7.5Y7/1灰白色及び2.5Y7/4黄褐色粘土30%含む 2層と同一層か
 - 3 10YR5/1 黒灰色 しまりやや礫、粘性強 φ5～20mmの7.5Y7/1灰白色及び2.5Y7/4黄褐色粘土30%含む
 - 4 10YR4/1 黒灰色だがφ5cm以上の7.5Y7/1灰白色及び2.5Y7/4黄褐色粘土が主体となる
 - 5 10YR5/1 黒灰色 しまりやや礫、粘性強 φ10～30mmの7.5Y7/1灰白色及び2.5Y7/4黄褐色粘土を多量に含むため全体として3層より色調が明るい
 - 6 2.5Y7/8 黄色粘土 IV層ブロックに黒灰色・黄灰色土が少量混入
 - 7 2.5Y5/1～6/1 黒灰色 しまりやや礫、粘性やや強 混和物ほとんど無く粘土質
 - 8 2.5Y5/1 黄褐色粘土 7層よりさらに粘土質
 - 9 2.5Y7/8 黄色粘土 IV層ブロックに黒灰色・黄灰色土が少量混入
 - 10 2.5Y4/1 黄褐色粘土 8層よりさらに粘性強い
 - 11 2.5Y5/1～6/1 黒灰色 しまりや礫、粘性強 IV層ブロック(φ6～20mm)と黄褐色砂を各30%含む
 - 12 2.5Y7/8 黄色粘土 IV層ブロックに黒灰色・黄灰色土が少量混入
- ※1～6層は人為的埋め戻し土

第6図 1～3号土坑

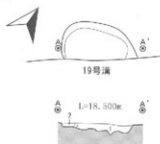
2 土坑

4号土坑



- 4号土坑
 1 10YR3/1黒褐色～4/1黒灰色 しまりやや密、粘沈渣 IV層ブロック (φ2～10mm) 15%、炭化物・焼土粒 (φ1～2mm) 10%を含む
 2 10YR5/1 褐色色 1・2層と類似するが、水成層様態であり粘性が非常に強い、IV層ブロック・炭化物あわせて3%含む

6号土坑

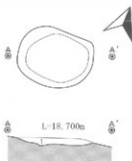


- 6号土坑
 1 10YR5/1 褐色色 しまりやや密、粘沈渣 酸化鉄 (φ1～3mm) 3%含む
 2 10YR7/2 に近い黄褐色 しまりやや密、粘沈渣 IV層崩落土

7号土坑

- 7号土坑
 1 10YR3/1黒褐色～4/1黒灰色 しまりやや密、粘沈渣 IV層ブロック (φ2～10mm) 15%、炭化物・焼土粒 (φ1～2mm) 各10%含む
 2 10YR4/1 褐色色 IV層ブロック (φ2～5mm) 10%、炭化物・焼土粒 (φ1～2mm) 各5%含む
 3 10YR5/1 褐色色 1・2層と類似するが、水成層様態であり粘性が非常に強い、IV層ブロック・炭化物あわせて3%含む

8号土坑



- 8号土坑
 1 10YR4/1 褐色色 しまりやや密、粘沈渣 IV層ブロック (φ2～10mm) 15%、炭化物・焼土粒 (φ1～2mm) 各10%含む

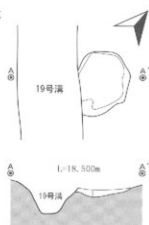
9号土坑

- 9号土坑
 1 10YR5/1 褐色色 しまり密、粘性強 酸化鉄 (φ1～3mm) 25%含む

10号土坑

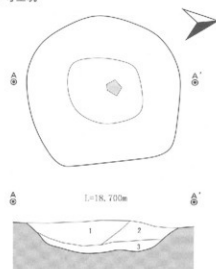
- 10号土坑
 1 10YR5/1 褐色色粘土 しまり密、粘性強 酸化鉄20%、下に埋出ブロック10%含む
 2 10YR5/1 褐色色とIV層崩落土の混合土 しまり密、粘沈渣 粘土質で底面の地山と類似するが表面より色調が濃い

5号土坑



- 5号土坑
 1 10YR5/1 褐色色と2.5YR/1 オリーブ灰色 (IV層崩落土) の混合土 しまり密、粘性が非常に強い

7号土坑



第7図 4～10号土坑



3 堀

1号堀（第8図、写真図版6・7）

<検出状況> IB5b~II B7イグリッドに位置する。他遺構との重複関係は無いが、北端は事業用地範囲外に延び、南端は水道管及び電柱敷設の際に壊されている為全形は不明である。検出された範囲の上面幅や深さをみる限りでは後述する溝と大差無い部分もあるが、後世の地形改変によって大幅に削平されていることと検出された長さを考慮して今回は堀跡として登録した。

<形状・規模> 調査区内では47.07m検出した。前述の通り南北両端とも調査区外へ延びているため全長はさらに長くなると考えられる。走行方向は北西-南東方向であり、南東端から北へ約27mまではN-14°-Wの方向に直線的に延びる。しかし、そこから北側は緩やかに角度を変え、調査区北端ではN-34°-Wまで軸方向が変化している。

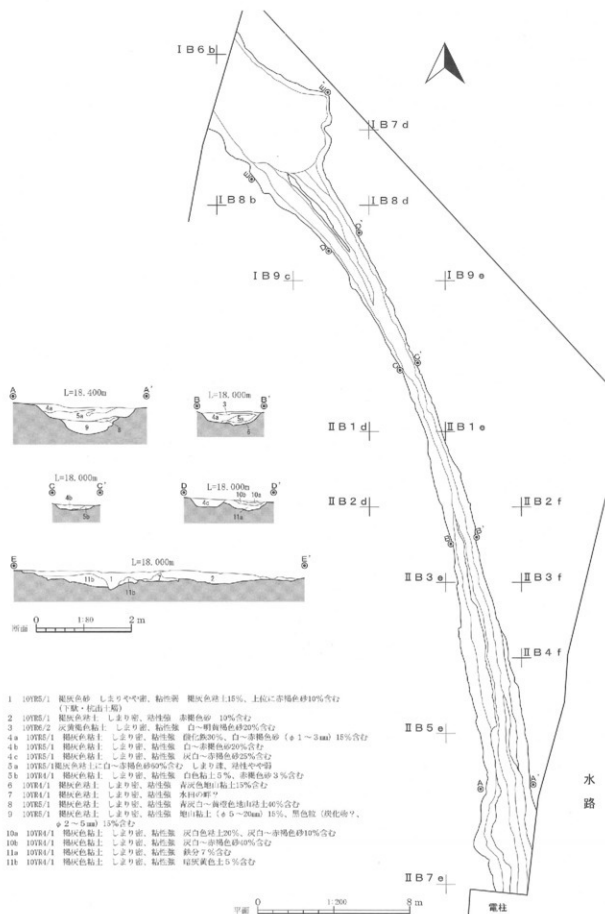
削平が著しいため、上面幅・深さとも本来の規模は留めていない。上面幅は、断面AからEの順に2.3m、1.2m、0.8m、1.7m、5.85mである。深さは、断面AからEの順に0.56m、0.3m、0.12m、0.2m、0.36mである。とくに堀の中央部分が非常に狭くなっているが、これは断面B~Eを設定したII B3グリッドライン以北がそれ以南よりも一段低く削平されていた為である。

断面形及び底面の状況は地点によって異なる。断面A付近では、壁面中位付近で平坦面が認められ、底面が二段階に掘り込まれているような形状となる。ただし、堆積土の状況を見るとこれらは一連で掘削されたものではなく、底面の狭い逆台形状のプランが埋没した後に底面の広い逆台形状のプランが掘削されたものと考えられる。断面B・C付近については基本的には断面形は逆台形が基調であるが、削平が著しいため皿形となる部分もある。また、断面D付近から北側は二段に分かれており、断面A付近と同様、堆積土の状況から一方のプランが埋没した後もう一方が掘削されている状況が確認された。以上のように見ていくと、平面的には1条に見える本堀跡は、本来は2条の堀跡が同位置に掘削されたものであったと考えられる。メンテナンスの為の掘り返しであった可能性も考えられるが、南側では初期の底面より浅く幅広く掘削されていること、また北西側では位置がずれて掘削されていることを考慮すると、初期の堀（以下、古段階の堀とする）がある程度埋没した後に改めて新しい堀（以下、新段階の堀とする）を掘削したのと考えた方が妥当であろう。

なお、断面E付近から北西側は急激に上面幅が拡大するが、堆積土の状況を見るとこれは流水の作用ではなく、人為的に掘り上げられた部分であると考えられる。

<堆積土> 10層に大別した。しかし、遺構の規模が大きいことから地点によって同一層でも混和物に若干の相違がみられたため、細分を行った層もある。地山ブロックの混入がほとんど無く、水成堆積と考えられる状況であることから、自然堆積による埋没であり埋没後も一定期間滞水・流水していたと考えられる。色調・混和物は各層とも大幅な差異は無いが、8層以下からは近世以降の遺物が出土していないことと底面直上出土の自然木（13）の年代測定結果を勘案すると、1~7層は近世以降の堆積土、8層以下は中~近世の堆積土と考えられる。

<出土遺物> 土師器（かわらけ）17.6g、須恵器10.6g、陶磁器700g、自然木を含む木製品、形状不明の鉄製品が出土している。このうち図示可能なかわらけ1点・須恵器1点・陶磁器9点・木製品8点を掲載した。出土傾向としては、陶磁器類は断面A・C・E付近の3・4層から、木製品は断面E付近の1・3層から多く出土している。土師器・須恵器については小破片が全域で微量ずつ出土している。ただし、木製品については水田耕作上除去中に検出された近現代に属する杭等もあった為、それらを除いた中で遺存状態が良好なものを野外調査中に選別・採取し、さらに室内整理の段階で保



第8図 1号堀

管・実測が必要なものをさらに選別している。

<性格・年代> 本堀跡は2条の堀が同位置に時期を違えて掘削されたものであることがわかった。なお、古段階の堀が掘削され、その位置をトレースするにはほぼ同規模で新段階の堀が掘削されていることから、少なくとも新段階の堀は古段階の堀の存在を認識した（古段階の堀が完全に埋没していなかったか）うえで掘削されたものと考えられる。ただし、遺物の出土状況から古段階と新段階の堀には一定期間の時間差が考えられることから、古段階の堀については新段階の堀の掘削前に機能を停止していたと考えられる。性格については、一定期間滞水していたと考えられることから導水施設として掘削された可能性は高いが、規模を考慮するとくに古段階の堀については区画（防壁？）の為に掘削された可能性も考えられる。

掘削・埋没の年代であるが、古段階の堀については8層出土の手づくねかわらけ（5）と底面直上から出土した木製品（13）の年代測定結果（850±30yrBP）から、13世紀以前に掘削されそれ以降に埋没を開始したと考えられる。一方で、新段階の堀の堆積土からは大橋編年IV期の肥前産磁器をはじめとする江戸時代後期以降の陶磁器類が出土していることから、その埋没は18世紀後半以降と考えられる。

4 溝

49条検出した（第9～18図、写真図版8～23）。規模・重複関係などは第3表の通りである。遺物の出土量が少ないことから性格・年代が不明なものが多い。出土遺物・年代測定結果・遺物の重複関係をもとに年代を推定すると、4・17・25～31・34～37・45・48号溝は古代（以降）、43号溝は古代～中世、24・32号溝は中世以降、18・19・44・47号溝は近世に属すると考えられる。

形状は、直線的に走るもの（4・19・29・43・44号溝など）、L字状に屈曲するもの（1・8号溝）、蛇行するもの（3・14・25号溝など）などがある。また、2・22・38号溝のように途中で二股に分かれるものや35・42号溝のように一方の端部が張り出したり小さく屈曲するものもある。

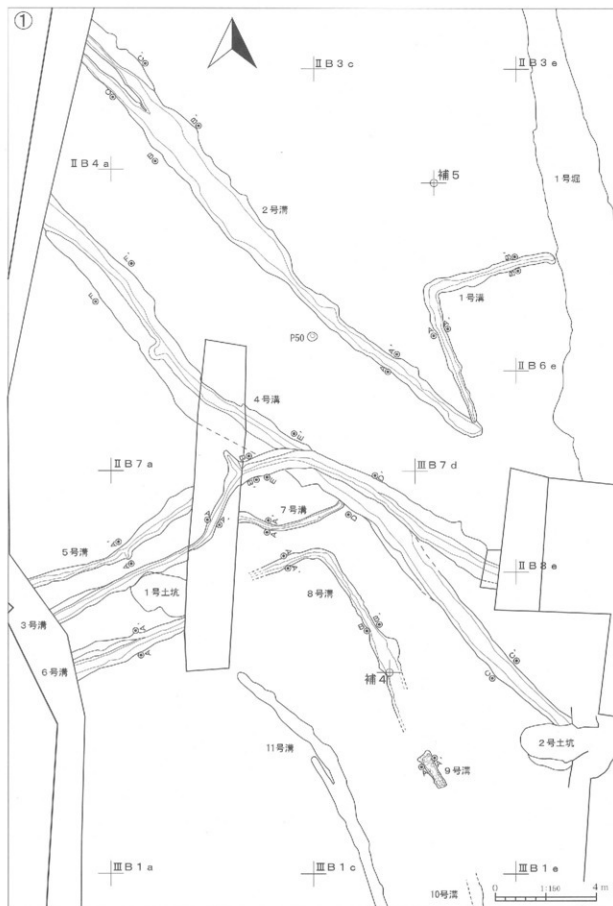
全長は、14号溝の1.63mを最小として、17・25号溝の約33mまでである。ただし、大半が調査区外へと延びているものであることから、この他にもこれ以上の規模の溝が存在している可能性は高い。

上面幅は、27号溝のように20cm前後のものから18号溝のように1.6m前後のものまで多様であるが、大半は1m以下のものである。

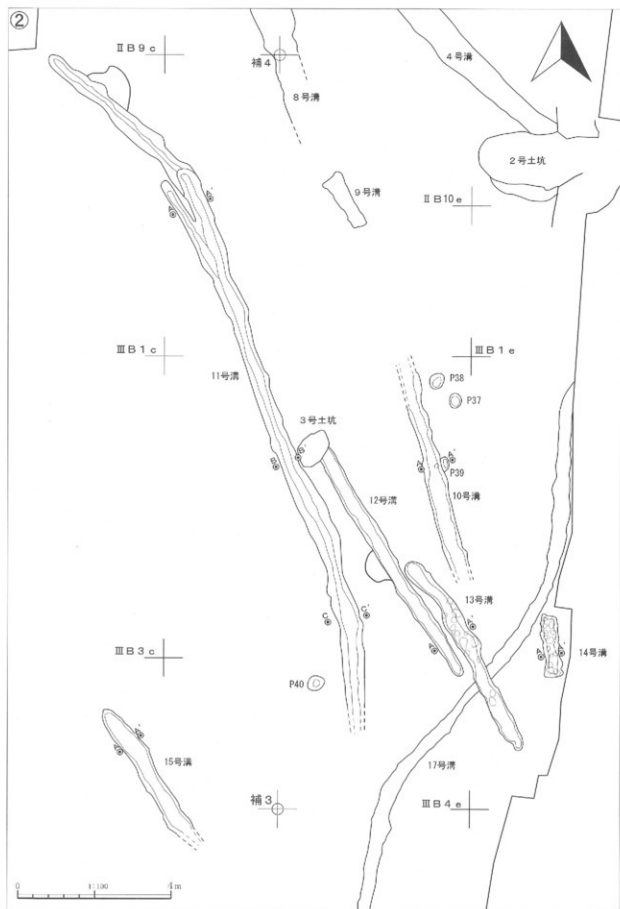
深さは削平の影響もあって19号溝を除いて30cm以下と非常に浅く、堆積土も単層のものが多い。断面形は判然としなないものが多かったが、若干でも底部脇が角度をもって立ち上がるものについては逆台形・箱形・丸形をもって立ち上がるものについては皿形とした。

出土遺物は約半数の溝で確認されているが、出土量は少ない。土師器・須恵器・陶磁器の小破片がほとんどであり、図示可能な遺物も少なかった。

性格については推定になるが、直線的あるいはL字状となっているものは水田などの区画用、底面が不整形で水が流れた痕跡が認められるもの（3・4号溝など）は導水の為の施設と考えられる。とくに35号溝のように直線的な溝は断面形が逆台形になるものが多く、古代以降区画の為に断面逆台形状の溝が掘削されていたものと考えられる。また、9・13・14号溝のように底面に掘削の際の工具痕跡が残るものもある。



第9図 溝・柱穴分割図①



第10図 溝・柱穴分割図②

1号溝



1号溝

- 1 7.5YR5/1 褐色色 しまりやや泥、粘性やや強
黒色粒子0%、酸化鉄20%含む
- 2 10YR4/1 褐色色 しまりやや泥、粘性やや強
酸化鉄30%含む

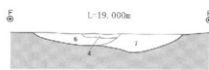
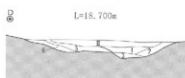
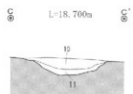
2号溝



2号溝

- 1 10YR7/1 灰白色 しまりやや泥、粘性やや強 酸化鉄20%含む
- 2 10YR6/1 褐色色～7/1灰白色 しまりやや泥、粘性やや強
黒色粒子(φ1～3mm)30%含む

3・4号溝



3・4号溝

- 1 7.5YR5/1 褐色色 しまり泥、粘性やや強 やや砂質 赤色の砂状土塊に褐色泥土含む
- 2 10YR5/1～6/1 褐色色 しまりやや泥、粘性強 IV層ブロック(2～10mm)10%含む
- 3 10YR7/1 灰白色 しまりやや泥、粘性中 灰白色の砂にIV層粘土30%含む
- 4 10YR6/1 褐色色 しまりやや泥、粘性やや強
- 5 7.5YR5/1 褐色色 しまり泥、粘性やや強 赤色砂30%含む
- 6 10YR6/1 褐色色 IV層粘土上30～50%含む
- 7 10YR6/1 褐色色 黒色粒子(φ1～3mm)20%含む
- 8 10YR7/8 灰白色 IV層粘土上
- 9 10YR7/6 明赤褐色 しまり泥、粘性強 IV層粘土ベースに砂が混入、酸化鉄多く含む
- 10 7.5YR5/1 褐色色 しまり泥、粘性強 やや砂質 褐色色粘土含み、11層との境界に赤色の多量な層状に30%含む
- 11 10YR6/1～6/1 褐色色 しまりやや泥、粘性強 IV層ブロック(2～10mm)10%含む
- ※1～3層は3号溝堆積土、4～11層は4号溝堆積土

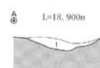
5号溝



5号溝

- 1 10YR5/1 褐色色 しまりやや泥、粘性やや強 やや砂質 IV層粘土12%含む

6号溝



6号溝

- 1 10YR4/1～6/1 褐色色 しまりやや泥、粘性強 IV層ブロック(φ2～10mm)16%含む

7号溝



7号溝

- 1 7.5YR5/1 褐色色 しまりやや泥、粘性やや強 IV層粘土5%、酸化鉄15%含む

9号溝



9号溝

- 1 10YR4/1 褐色色 しまりやや泥、粘性強 酸化鉄20%含む
- 2 10YR5/1 褐色色 IV層ブロック60%で粘性非層に多い

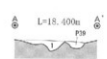
8号溝



8号溝

- 1 10YR5/1 褐色色 しまりやや泥、粘性強 酸化鉄(φ1～5mm)30%含む
- 2 10YR8/2 灰白色～7/2L～5/1黄褐色 IV層粘土上の灰色層

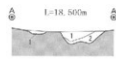
10号溝



10号溝

- 1 10YR4/1 褐色色 しまり泥、粘性強 酸化鉄30%含む
- P29 10YR4/1 褐色色 しまり泥、粘性強 10号溝堆積土より酸化鉄が少ない

11号溝



11号溝

- 1 10YR5/1 褐色色 しまりやや泥、粘性やや強 IV層ブロック土中に多く30%含む
- 2 10YR6/1 褐色色 しまりやや泥、粘性やや強 酸化鉄30%、IV層ブロック5%含む

12・13号溝



12・13号溝

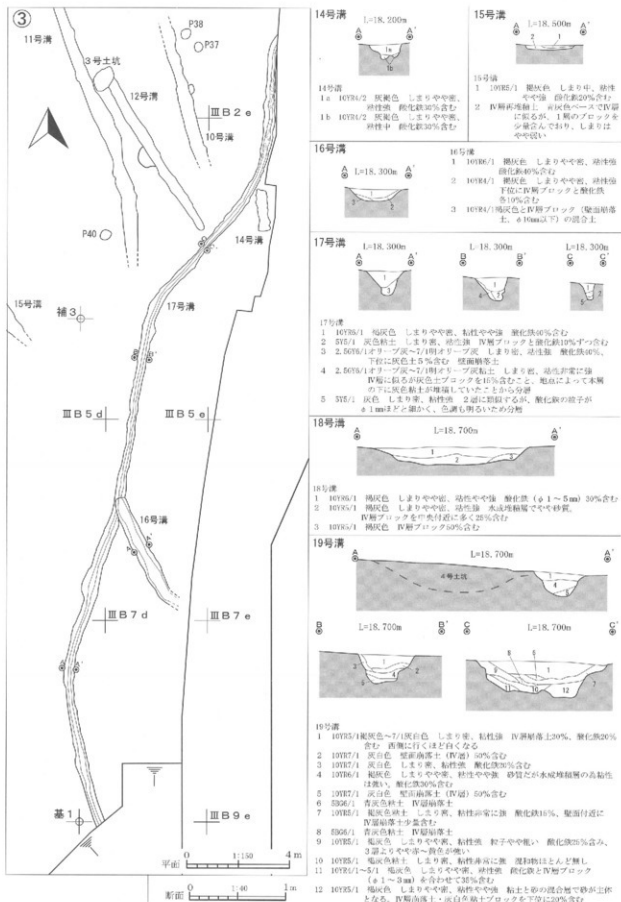
- 1 10YR5/1 褐色色 しまりやや泥、粘性強 酸化鉄30%含む

11号溝

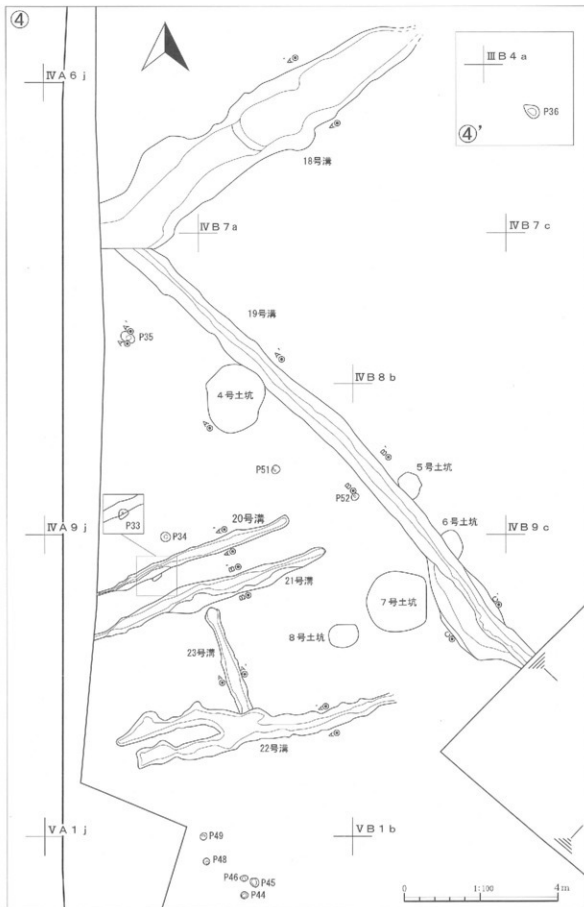
- 1 10YR5/1 褐色色 しまりやや泥、粘性やや強 IV層ブロック土中に多く30%含む
- 2 10YR6/1 褐色色 しまりやや泥、粘性やや強 酸化鉄30%、IV層ブロック5%含む



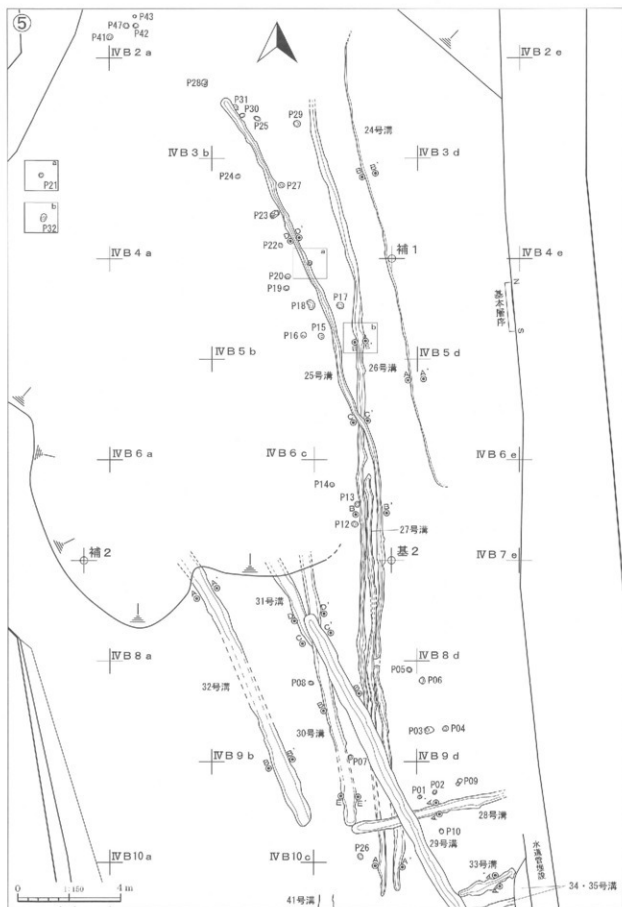
第11図 溝断面図①



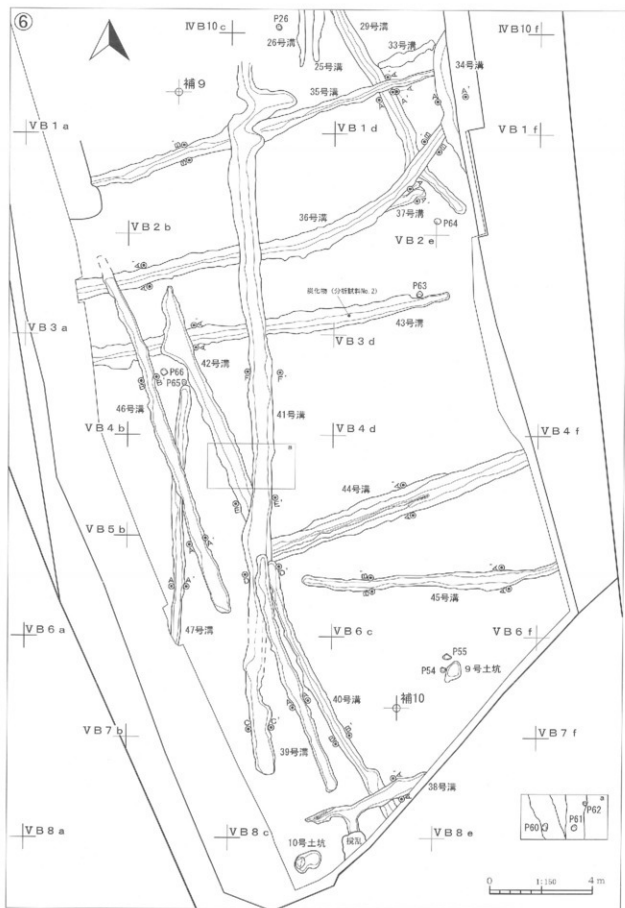
第12図 溝・柱穴分割図③、溝断面図②



第13图 溝・柱穴分割图④



第14図 溝・柱穴分割図⑤



第15图 溪・柱穴分割图⑥

20・21号溝



- 20号溝 (A-A')
 1 101R5/1 褐色土、しまりやや割、粘性土、酸化鉄 (φ1~3mm) 20%含む
- 21号溝 (B-B')
 1 101R5/1 褐色土、しまりやや割、粘性土、酸化鉄 (φ1~3mm) 20%含む、20号溝1層よりしまり砂入り

22号溝



- 22号溝
 1 101R5/1 褐色土、しまりやや割、粘性土、酸化鉄 (φ3~4mm) 各10%含む

23号溝



- 23号溝
 1 101R5/1 褐色土、しまりやや割、粘性土、酸化鉄 (φ2~4mm) 各10%含む

24号溝



- 24号溝
 1 101R2/1~3/1 黒褐色土、IV層粘土層上

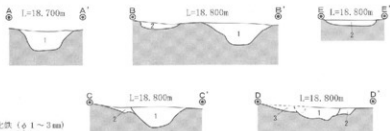
- 25・26・27号溝
 1 101R5/1 褐色土、しまりやや割、粘性土、IV層ブロック (φ3~5mm) 5%含む
 2 101R5/1 褐色土と101R2/4 黒褐色土の混合土、しまりやや割、粘性土、IV層とIV層粘土層上 (IV層) の混合層
 3 101R5/1~6/1 褐色土、しまりやや割、粘性土、酸化鉄 (φ1~3mm) 10%、IV層粘土層ブロック (φ5~20mm) 15%含む
 4 101R5/1 褐色土、しまりやや割、粘性土、酸化鉄 (φ1~3mm) 10%、IV層粘土層ブロック (φ5~20mm) 15%含む
 5 101R5/1 褐色土、しまりやや割、粘性土、IV層ブロック (φ3~5mm) 5%含む
 6 101R2/1に高い黒褐色土と101R5/1褐色土が7:3の割合で混合、粘性土、IV層粘土層上と1層の混合層で23号溝2層よりよく、粘性土強い
 ※1~3が25号溝、4・5層が26号溝、6層が27号溝の構成上

28号溝



- 28号溝
 1 101R5/1 褐色土、しまりやや割、粘性土、酸化鉄10%、IV層粘土層ブロック (φ2~10mm) 5%含む

29・30・31号溝



- 29・30・31号溝
 1 101R5/1~5/1 褐色土、しまりやや割、粘性土、酸化鉄 (φ1~3mm) 25%、IV層粘土層ブロック (φ5~20mm) 15%含む
 2 101R5/1~6/1 褐色土、しまりやや割、粘性土、酸化鉄 (φ1~3mm) 25%、IV層粘土層ブロック (φ5~20mm) 15%含む
 3 101R5/1~6/1 褐色土、しまりやや割、粘性土、酸化鉄 (φ1~3mm) 25%、IV層粘土層ブロック (φ5~20mm) 15%含む
 ※1 1層が29号溝、2層が30号溝、3層が31号溝の構成上
 ※2 性質は緑砂状するが各層の境界に若干酸化鉄の跡が形成されているためそれぞれに分節

32号溝



- 32号溝
 1 101R4/1 褐色土、しまりやや割、粘性土、黒色粘土 (φ2~10mm) 10%、武田付粘土IV層ブロック 3%含む

35号溝



- 35号溝
 1 101R/1 灰色、しまりやや割、粘性土、酸化鉄10%、上に赤褐色砂15%含む

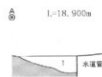


33号溝



- 33号溝
 1 101R5/1 褐色土、しまりやや割、粘性土、酸化鉄10%、IV層粘土層ブロック (φ2~10mm) 5%含む

34号溝



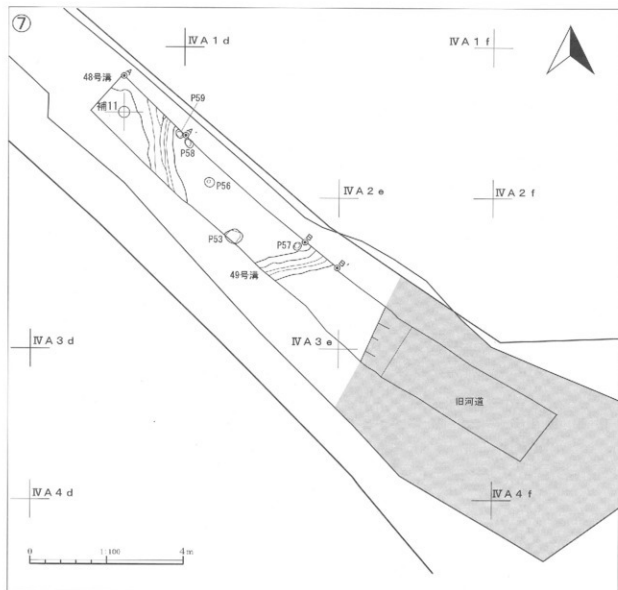
- 34号溝
 1 101R2/1 褐色土、しまりやや割、粘性土、上に黒色の酸化鉄 (φ2~5mm) 30%、下に赤色の酸化鉄20%含む

36号溝



- 36号溝
 1 101R5/1~6/1 褐色土、しまりやや割、粘性土、酸化鉄20%、IV層ブロック (φ3~10mm) 10%含む
 2 101R5/1 褐色土、しまりやや割、粘性土、黒色粘土5%含む、非常に硬く締まる
 3 101R5/1 褐色土、IV層ブロック10%含む、下位はやや締りで1層同様硬く締まる

第16図 溝断面図③



37号溝



37号溝
1 10YR5/1 黄灰色粘土 しまり密、粘性强
黒色砂子5%含む

38号溝

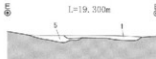
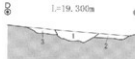


38号溝
1 10YR5/1 黄灰色 しまり密、粘性强 腐植炭
(φ1~5mm) 20%含む



L=19.300m
2 10YR5/1 黄灰色 しまり中々密、粘性强 腐植炭(φ1~5mm) 20%含む

39・40・41・42号溝



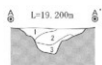
39・40・41・42号溝

1 5YR6/1 灰色粘土 しまり中々密、粘性强 39・40号溝より若干下色顕著
2 10YR5/1 黄灰色 しまり密、粘性强 腐植炭(φ1~2mm) 5%含む
3 10YR6/1 黄灰色 しまり中々密、粘性强 腐植炭(φ1~5mm) 20%含む
4 10YR5/1-6/1 黄灰色 しまり中々密、粘性强 腐植炭(φ1~5mm) 20%、黒色砂子10%含む
5 2.5Y5/1 黄灰色 しまり中々密、粘性强 やや粒子粗い 腐植炭(φ2~10mm) 20%、黒色砂子10%含む
※1層が39号溝、2層が40号溝、3・4層が41号溝、5層が42号溝連続土

0 100 3m

第17図 溝・柱穴分割図⑦、横断面図④

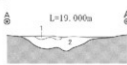
43号溝



43号溝

- 1 10YR5/1 灰白色 しまり密、粘性强
酸化鉄35%含む
2 10YR1/1 灰白色 しまり密、粘性强 やや砂質
黒色粒子35%、酸化鉄5%含む
3 10YR2/1 灰白色粒に しまり密 IV層ブロック
(φ5~10mm) 10%含む

44号溝



44号溝

- 1 10YR4/1 黒灰色土に しまり密 赤褐色の
酸化鉄60%含む
2 10YR4/1 黒灰色土に 赤層ブロック (φ2
~10mm) 15%、酸化鉄20%含む

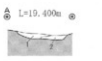
45号溝



45号溝

- 1 10YR4/1 黒灰色 しまり密、粘性强 IV層ブロック
(φ2~5mm)、酸化鉄各30%含む、両側
はIV層ブロックなく、酸化鉄が多くなる

46号溝



46号溝

- 1 2.5Y7/1 灰白色粘土 酸化鉄20%含む
2 2.5Y7/6 赤黄褐色粘土 IV層増殖土

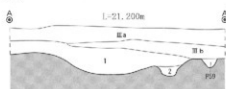
47号溝



47号溝

- 1 2.5Y5/1 黄白色 しまりやや密、粘性强
やや砂子混い 酸化鉄(φ2~
10mm) 20%、黒色粒子10%含む。
北側ほど黒色粒子の割合多くなる

48号溝



48号溝

- 1 10YR5/1 黒灰色 しまりやや密、粘性强
2 10YR5/1 黒灰色 しまりやや密、粘性强

- 酸化鉄(φ1~10mm) 20%、黄褐色土ブロック5%含む
酸化鉄30%、黄褐色土ブロック5%含む

49号溝



5 柱 穴

65個検出した(第9・10・12~15・17図・18図、写真図版24・25)。全てIV層上面で検出している。規模・形状は第4表の通りであり、上面が削平されているため規模が小さく浅いものがほとんどである。IVBグリッド内で幾つかの集中域がみられるが、掘立柱建物や柱穴列を構成するような規則的な配置のものは確認できない。出土遺物も乏しく、図示できたものはP29出土の石鏃(36)とP59出土の土器器臺(37)のみである。

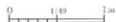
第18図 清断面図⑤

P35



P35

- 1 10YR1/1 黒灰色 しまりやや密、粘性强 IV層ブロック
(φ5~10mm) 10%、酸化鉄(φ1~3mm) 20%含む
2 10YR5/1 灰白色に10YR7.5黄褐色(IV層腐土)含む 粘性强
遺物粘土



第3表 満計測表

点番名	分割回 No.	ブイコード 北(北)→南(南)	上陸方向	全長(m)	幅(m)	深さ(m)	橋脚形状	埋積土
1号溝	①	IB5d-IB6d	N-71°-W、N-63° E	10.65	25-57	9	矩形	2層
2号溝	①	IA2j-IB8j	N-69°-W	(22.08)	52-163	13	矩形	2層
3号溝	①	IA8j-IB5d	N-35° W・N-27°-E	(21.34)	56-127	20	皿・逆台形	3層
4号溝	①	IA4j-IB9e	N-45°-W	(29.03)	50-156	20	皿・逆台形	3層
5号溝	①	IA7j-IB7a	N-53°-E・N-72°-E	(7.83)	21-86	6	矩形	1層
6号溝	①	IA8j-IB8a	N-68°-E	(4.70)	68-102	12	矩形	1層
7号溝	①	IB7b-IB7c	N-72° W・N 70° E	(4.56)	19-40	5	矩形	1層
8号溝	①	IB7b-IB8c	N-30°-W・N-69°-E	(9.56)	33-38	12	逆台形	2層
9号溝	①	IB9d	N-31°-W	(1.50)	42	5	矩形	2層
10号溝	②	IB1d-IB2d	N-10°-W	(5.82)	48	11	不整形	1層
11号溝	②	IB9b-IB8d	N-30-48° W	(19.57)	29-33	13	皿・逆台形	2層
12号溝	②	IB1d-IB3d	N-31°-W	(6.89)	46	4	矩形	1層
13号溝	②	IB2d-IB3c	N-27°-W	5.70	51	7	矩形	1層
14号溝	②	IB2c	N-5°-W	1.63	38	16	矩形	1層
15号溝	②	IB5b-IB4c	N-34° W	(3.95)	53	5	矩形	2層
16号溝	③	IB5d-IB6d	N-23°-W	(4.36)	35	12	逆台形	3層
17号溝	③	IB7e-IB9c	N-13°-W・N-6~90°-E	(32.91)	43	26	矩形	5層
18号溝	④	IA6j-IB6b	N-50°-E	(9.69)	165	19	逆台形	3層
19号溝	④	IA7j-IB9c	N-44°-W	(13.29)	59-138	38	皿・逆台形	12層
20号溝	④	IA9j-IB8a	N 68° E	(5.55)	9-36	6	矩形	1層
21号溝	④	IA9j-IB9b	N-69°-E	(6.45)	13-74	8	矩形	1層
22号溝	④	IA10j-IB10b	N-81°-E	(7.29)	23-110	7	矩形	1層
23号溝	④	IB9a-IB10a	N-18°-W	(2.90)	42	7	矩形	1層
24号溝	⑤	IB1c-IB6d	N-13°-W	(17.93)	(30)	4	矩形?	1層
25号溝	⑤	IB2b-IB10c	N-1-33°-W	(32.82)	21-49	8	皿・逆台形	3層
26号溝	⑤	IB2b-IB10c	N-1~14°-W	(31.46)	19-44	8	皿・逆台形	2層
27号溝	⑤	IB6c-IB8c	N 4° E・N-6°-E	(9.87)	17-24	3	矩形	1層
28号溝	⑤	IB9c-IB9d	N-79°-E	(5.81)	35	3	矩形	1層
29号溝	⑤	IB7b-VB1e	N-27°-W	(19.47)	36-74	21	逆台形	1層
30号溝	⑤	IB7b-IB9c	N-10°-W	(10.23)	46	7	逆台形	1層
31号溝	⑤	IB7b	N-35° W	(2.80)	46	6	矩形	1層
32号溝	⑤	IB7a-IB9b	N-23°-W	(11.05)	54-69	6	矩形	1層
33号溝	⑤	IB10d	N-66°-E	2.37	24	5	矩形	1層
34号溝	⑤	IB10c-VB1c	N-9°-W	5.74	(69)	16	矩形?	1層
35号溝	⑥	VB1a-IB10d	N 71° E	(14.06)	21-66	14	逆台形	1層
36号溝	⑥	VB2a-IB10c	N-56-77°-E	(17.30)	43-82	25	逆台形	3層
37号溝	⑥	VB1d	N-62°-E	(1.54)	35	4	矩形	1層
38号溝	⑥	VB7c-VB7d	N 9° W・N 69°-E	(4.83)	44-67	10	不整形	1層
39号溝	⑥	VB5c-VB7d	N-2~21°-W	9.68	44	11	逆台形	1層
40号溝	⑥	VB5c-VB7d	N-12-30°-W	(11.11)	50	7	矩形	1層
41号溝	⑥	IB10c-VB1c	N-5-9° W・N 1° E	(28.25)	65-104	9	逆台形	2層
42号溝	⑥	VB2b-VB4c	N 20° W	(11.30)	86	8	不整形	3層
43号溝	⑥	VB3a-VB2e	N-79°-E	(14.08)	35-70	26	不整形台形	3層
44号溝	⑥	VB5c-VB4c	N-68°-E	(10.67)	100	15	逆台形	2層
45号溝	⑥	VB5c-VB5f	N-73-88° E	(10.06)	38-75	14	逆台形	1層
46号溝	⑥	VB2a-VB5b	N 19° E	(13.99)	47-35	12	皿・逆台形	2層
47号溝	⑥	VB3b-VB4b	N-2°-E	(10.21)	46	12	矩形	1層
48号溝	⑦	IB1c	N-10°-W	(2.23)	66-149	28	不整形	2層
49号溝	⑦	IA3d	N 73° E	(1.50)	58	16	矩形	1層

※点番名の()は保存地、山土遺物標の()は船載番号

出土遺物	編年關係 (目録<◎—本遺構<新期)	時期	備考	遺構名
—	3号溝<◎	不明		1号溝
須磨器 3.1g	◎<1号溝	不明		2号溝
土師器 5.5g、鉄片 95.5g	4号溝<◎	不明		3号溝
土師器 26.5g、須磨器 12.8g	◎<2号土坑・3号溝	古代		4号溝
土師器 8.1g	—	不明		5号溝
—	—	不明		6号溝
—	◎<4号溝	不明		7号溝
—	—	不明	3・10号溝上一部<	8号溝
—	P 39<◎	不明		9号溝
—	—	不明		10号溝
—	◎<3号土坑	不明		11号溝
—	17号溝<◎	不明		12号溝
—	—	不明		13号溝
—	—	不明	下具根	14号溝
—	—	不明		15号溝
—	17号溝<◎	不明		16号溝
須磨器 29.5g (21)	◎<13・16号溝	古代		17号溝
土師器 7.9g、須磨器 13.2g、陶磁器 0.8g	19号溝<◎	近世		18号溝
土師器 5.9g	4・5・6号土坑<◎	近世		19号溝
—	P 33<◎	不明		20号溝
土師器 6.5g	—	不明		21号溝
土師器 10.5g、須磨器 1.5g	23号溝<◎	不明		22号溝
—	◎<22号溝	不明		23号溝
陶器 (22)、須磨器 66.9g	—	中世?		24号溝
土師器 1.4g、須磨器 7.1g	25号溝・P 21<◎<27・28・29号溝	古代		25号溝
石版 (23)	P 32<25・28・29号溝	古代		26号溝
—	22号溝<◎<28号溝	古代		27号溝
土師器 0.7g	25・26号溝<◎<29号溝	古代		28号溝
土師器 6.8g (24)、須磨器 54.1g	25・26・27・28・30・31号溝<◎<35・36号溝	古代		29号溝
石版 (25)、土師器 4.4g	31号溝<◎<39号溝	古代		30号溝
—	◎<29・30号溝	古代		31号溝
陶磁器 1.3g (26)、18922 26.8g、須磨器 13.5g	—	中世?		32号溝
—	—	不明		33号溝
土師器 24.8g (27)、鉄片 92.8g	35・36号溝<◎	古代以降		34号溝
須磨器 107.6g (28)、土師器 75.1g	26号溝<◎<34・41号溝	古代?	46R10.1.529 yBP	35号溝
土師器 76.0g (29)、須磨器 73.8g (30)	29・37号溝<◎<34・41・46号溝	古代		36号溝
—	◎<35号溝	古代		37号溝
—	◎号溝<◎	不明		38号溝
須磨器 21.0g (31)、土師器 10.9g	40・41号溝<◎	不明		39号溝
—	41号溝<◎<38・39号溝	不明		40号溝
土師器 148.9g (32)、須磨器 29.8g	35・36・42・43・44号溝・P 61・62<◎<39・40号溝	近世以降		41号溝
—	43号溝・P 60<◎<41号溝	不明		42号溝
土師器 1.0g	◎<41・42・46号溝	古代<中世	890±30 yBP	43号溝
陶磁器 29.8g (33・34)	◎<41号溝	近世		44号溝
土師器 4.1g、須磨器 4.6g	—	古代		45号溝
—	36・43・47号溝<◎	不明		46号溝
土師器 3.7g、須磨器 2.6g、陶磁器 3.9g	◎<46号溝	近世		47号溝
須磨器 14.8g (35)、土師器 31.8g	—	古代		48号溝
—	—	不明		49号溝

第4表 柱状計測表

No.	分取回 No.	グループ	上部径 (mm)	長さ (mm)	底面径 (mm)	土質記載		備考
						1	2	
P01	⑤	IV B 3 d	19×15	9	18.52	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P02	⑤	IV B 3 d	10×15	11	18.16	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P03	⑤	IV B 3 d	36×27	11	18.41	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P04	⑤	IV B 3 d	26×20	10	18.43	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P05	⑤	IV B 3 c	33×21	14	18.44	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P06	⑤	IV B 3 d	38×23	12	18.10	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P07	⑤	IV B 3 c	21×15	27	18.42	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む 2. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P08	⑤	IV B 3 c	21×16	23	18.53	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P09	⑤	IV B 3 d	17×15	11	18.42	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P10	⑤	IV B 3 d	21×16	14	18.47	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P12	⑤	IV B 3 c	28×23	14	18.43	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P13	⑤	IV B 3 c	24×20	9	18.48	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P14	⑤	IV B 3 c	18×18	15	18.44	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む 2. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P15	⑤	IV B 3 c	25×23	12	18.41	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P16	⑤	IV B 3 b	25×20	18	18.28	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P17	⑤	IV B 3 c	29×26	16	18.32	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む 2. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P18	⑤	IV B 3 b	29×28	25	18.37	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P19	⑤	IV B 3 b	22×21	10	18.45	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		1層目 1.2g
P20	⑤	IV B 3 b	23×20	13	18.41	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P21	⑤	IV B 3 b	20×29	25	18.39	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		25層目 1.2g
P22	⑤	IV B 3 b	21×17	11	18.40	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P23	⑤	IV B 3 b	39×24	18	18.38	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P24	⑤	IV B 3 b	21×19	8	18.30	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P25	⑤	IV B 2 b	29×28	11	18.42	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P26	⑤	IV B 3 c	26×20	14	18.61	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む 2. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P27	⑤	IV B 3 b	24×22	11	18.39	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P28	⑤	IV B 2 a	29×23	27	18.33	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P29	⑤	IV B 3 b	29×26	39	18.17	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む 2. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		2層目 30.2g
P30	⑤	IV B 3 b	29×18	11	18.47	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P31	⑤	IV B 3 b	27×21	22	18.37	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P32	⑤	IV B 3 c	34×21	9	18.35	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		25層目 1.2g
P33	⑤	IV A 5 j	31×26	20	18.58	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		25層目 1.2g
P34	⑤	IV A 9 j	28×25	30	18.46	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む 2. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		25層目 1.2g
P35	⑤	IV A 7 j	41×26	52	18.52	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む 2. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		1層目 1.4g 25層目 1.4g
P36	⑤	IV B 4 a	47×32	9	18.60	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P37	⑤	IV B 1 d	49×32	8	18.17	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P38	⑤	IV B 1 d	48×36	6	18.18	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P39	⑤	IV B 1 d	33× 〇1 j	7	18.15	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		1層目 1.2g
P40	⑤	IV B 3 d	42×44	11	18.15	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P41	⑤	IV B 1 a	52×35	25	18.53	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P42	⑤	IV B 1 a	30×30	15	18.62	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P43	⑤	IV B 1 a	15×15	9	18.61	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P44	⑤	IV B 1 a	30×19	21	18.55	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P45	④	IV B 1 a	36×22	12	18.61	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P46	④	IV B 1 a	20×17	10	18.63	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P47	⑤	IV B 1 a	21×22	9	18.71	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P48	④	IV B 1 a	18×17	15	18.63	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P49	④	IV B 1 a	21×17	19	18.60	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P50	④	IV B 5 b	40×35	17	18.70	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P51	④	IV B 8 a	29×21	17	18.44	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P52	④	IV B 8 b	20×18	13	18.32	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P53	④	IV A 2 d	44×30	14	20.38	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P54	④	IV B 6 a	21×21	8	18.86	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P55	④	IV B 5 a	36×24	7	18.87	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P56	④	IV A 1 d	27×25	18	20.38	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P57	④	IV A 2 d	29×20	31	20.22	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P58	④	IV A 1 d	26×20	38	20.39	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P59	④	IV A 1 d	25×18	26	20.50	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		1層目 0.8g 25層目
P60	④	IV B 3 c	31×22	18	18.95	1. 2.5 Y 3/1 黄褐色土 粘性土質 35%含む		
P61	④	IV B 3 c	26×25	20	18.81	1. 2.5 Y 3/1 黄褐色土 粘性土質 35%含む		1層目 1.2g
P62	④	IV B 3 c	17×17	11	18.90	1. 2.5 Y 3/1 黄褐色土 粘性土質 35%含む		1層目 1.2g
P63	④	IV B 2 d	20×23	13	18.85	1. 2.5 Y 3/1 黄褐色土 粘性土質 35%含む		1層目 1.2g
P64	④	IV B 1 d	26×22	27	18.31	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P65	④	IV B 3 b	23×17	18	18.30	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		
P66	④	IV B 3 b	29×29	12	19.01	1. 10 Y 3/1 緑褐色 しまり堅、粘り強、軟弱 軟化層 (φ1-3mm) 35%含む		

※P11は白粉・補填後に根本掘であることが判別したため消す

V 出土遺物

今回の調査では、土器（土師器・須恵器・かわらけ）、陶磁器（中世陶器・近世～近代陶磁器）、石器（石鏃・鏃石器）、石製品（砥石・石臼）、木製品（卜・建築部材・枕）、その他（獣歯・種子）が出土した。しかし、出土量は少なく総重量は10kg弱である。以下では種別ごとに説明を加える。

1 土器

土師器が766g、須恵器が718g出土している。摩耗した小破片がほとんどであり、完形に復元できる個体は皆無である。なお、今回の調査ではかわらけも出土しているが、小破片では土師器との区別が困難であることから重量は土師器に含めている。

土師器には坏と甕があり、4点を掲載した（27・29・32・37）。坏はロクロ成形で、不掲載のものを含めて内面に黒色処理が施されるものは無い。甕は口縁部と底部の破片があるが、いずれもロクロを用いずに成形されている。

かわらけは2点出土しており、全点掲載した（5・38）。5は手づくねかわらけで、口縁部には二段のナデ調整が認められる。38はロクロかわらけ小皿と考えられるが、全形は不明である。

須恵器は坏と甕類・大甕があり7点掲載した（4・21・24・28・30・31・39）。甕類はロクロ成形で、内外面に回転ナデ調整が施されるものと外面に削り調整が施されるものがある。大甕は外面に叩き目、内面には指押さえの痕跡が認められる。

2 陶磁器

明確に現代の製作と考えられるものを除いて約2kg出土しており、遺構内出土のものを中心に19点を掲載した。いずれも国産で、大きく中世陶器と近世（～近代）陶磁器に大別できる。

(1) 中世陶器（2・22・26・35・40・41）

瀬美窯産陶器・常滑窯産陶器・伊豆沼産陶器がある。

瀬美窯産陶器としては甕の体部破片が2点出土しているが、いずれも小破片である（26・40）。

常滑窯産陶器は、甕と鉢の口縁部破片が各1点出土している（2・35）。2は口縁端部の造作から13～14世紀に属すると考えられる。35は山茶碗系の無軸陶器の可能性がある。

伊豆沼産産としたものには、甕の底部破片と片口鉢の口縁部破片がある（22・41）。

(2) 近世（～近代）陶磁器（1・6～12・33・34・42～44）

器種には碗・皿類と鉢類があり、産地は美濃窯・肥前・大塚相馬・東北地方産がある。年代的には近世初期（16世紀末～17世紀初頭＝瀬戸窯編年大窯4期～連房式登窯I期）、近世後期（18世紀＝肥前大橋編年IV期）、その他不明のものに分類できる。

1) 碗・皿類

6は大塚相馬産陶器碗である。高台部を除いて灰釉が施される。7は肥前産陶器皿である。灰釉をベースに銅緑釉が流し掛けされ、さらに体部内面に蛇の目状の釉剥ぎが行われる。また、釉剥ぎされた部分には焼成時に使用された砂目の痕跡が認められる。8は産地不明の陶器皿である。黄色がかっ

た灰釉が施され、体部内面には重ね焼きの痕跡が認められる。10は産地不明の陶器小皿である。釉薬は施されず、赤褐色の焼き上がりである。底部には回転糸切の痕跡が認められる。33は美濃窯産志野皿である。全面に長石釉が施される。34・43は肥前産磁器皿である。両者とも単色呉須の製品で、内面に草花文が描かれた後に透明釉が施される。44は東北地方産と考えられる磁器紅皿である。

2) 鉢類

鉢類には擂鉢・鉄絵鉢・向付・その他形状不明のものがある。1・42は東北地方産と考えられる擂鉢で、内外面に鉄釉が施される。11は鉄絵鉢である。体部は直線的に外方に立ち上がり、口縁部は圧縁状となる。胎土及び外面の色調は暗灰色である。9は美濃窯産志野向付である。小破片で全形は不明であるが、口縁部の形状から灰落しに類似した形状の向付と考えられる。12は産地不明の筒形鉢である。底部脇に最大径を持ち、上部ほど直径が小さくなっていく。底部外面を除いて暗緑色の灰釉が施され、体部外面には黄白色の灰釉が二度掛けされる。胎土は赤褐色である。

3 木製品

全て1号堀から出土しており、選別・採集の方法については前章の通りである(13~20)。

13は底面直上から出土した自然木である。残存する部分には加工痕が認められないことから自然木と判断した。年代測定の結果、850±30yrBPという年代が得られている(第VI章第2節)。

14・15は杭である。いずれも先端部に加工痕が認められ、本体部には若干樹皮が残存している。材質は、14がサクラ属、15がアカマツである。

16は建物の建築部材と考えられる木製品である。全体に腐食が著しいが、一端にホゾ穴と考えられる加工痕が認められる。材質はアカマツである。

17はアカマツ製の板材である。両側面に面取りの痕跡が認められる。

18は差歯式の下駄である。本体部分は底面の長い四角錐状で、鼻緒を取り付けるための穴が二箇所確認できる。歯を取り付けるための穴も二箇所確認できるが、歯は1個しか残存していない。本体部分の材質はナナカマド属である。なお、歯については樹種同定を行っていないが、一般的に本体より強度の高い材(ケヤキなど)が使用されることが多い。本例も本体より硬い材質であることからケヤキの可能性はある。

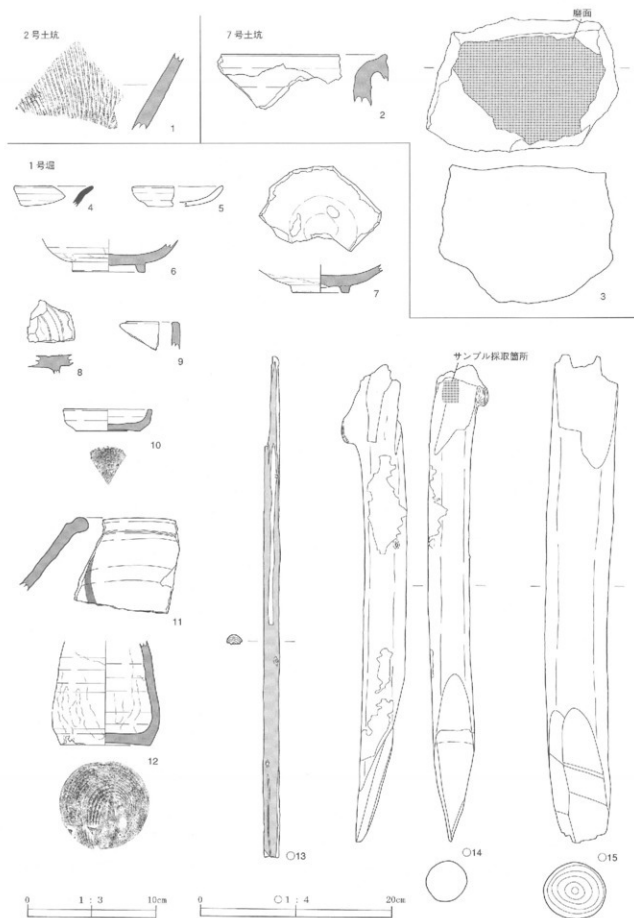
19は用途不明の製品である。形状的には差歯式下駄の歯の可能性もあるが、18とは同一個体ではない。樹種同定は行っていないが、18の本体部分より硬い木材(ケヤキ)が使用されている。

20は先端が杭状に加工された製品である。建築部材の可能性もあるが用途は不明である。材質は19と類似した硬い木材である。

4 石器・石製品

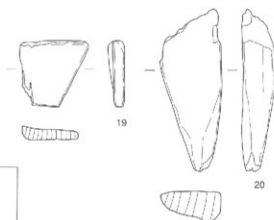
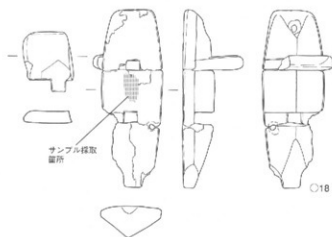
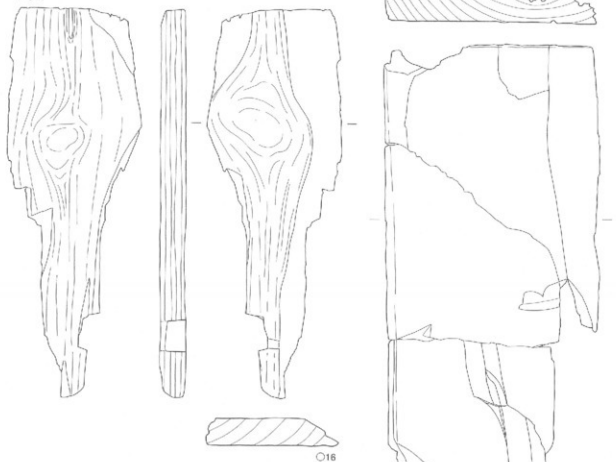
8点掲載した(3・23・25・36・45~48)。石鏃は5点掲載した(23・25・36・45・46)。刃部平面形はいずれも長三角形である。基部形状は、右茎式(23・25)・平茎式(36)・凹茎式(45・46)がある。材質は、頁岩及び珪質頁岩である。

3は砂岩製の磨石である。大部分欠損しているが、一面に使用痕が認められる。47は凝灰岩製の砥石である。大部分欠損しているが、一面に使用痕が認められる。48は花崗閃緑岩製石臼の小白である。全体の約1/6しか残存していないが、放射状の卸し目と穀物を落とすし込む穴が確認できる。

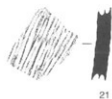


第19図 出土遺物(1)

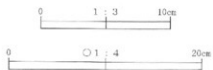
1号礎



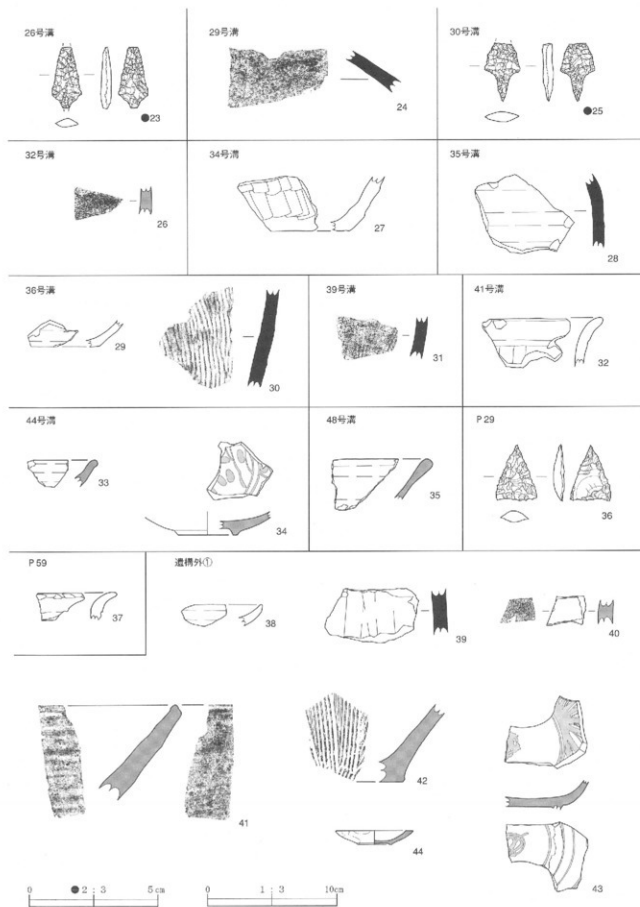
17号溝



24号溝



第20図 出土遺物(2)

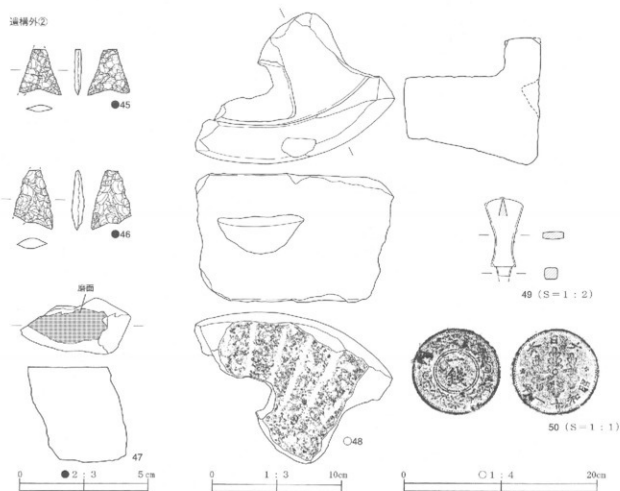


第21図 出土遺物(3)

5 金属製品

全て遺構外からの出土で、4点掲載した(49~52)。49は方頭式の鉄鍔で、関部は台形関である。50は一銭銅貨である。51・52は鉄滓である。51は流状滓、52は鍛冶滓であり、いずれも磁着はしない。

遺構外②



第22図 出土遺物(4)

第5表 土器観察表

掲載No.	種別	器種	出土地点・層位	部位	計測値 (cm)		残存率 (%)		調査技法	外面色調	備考
					器高	口径	底径	底径			
4	須恵器	杯	1号塚西面E南側 Ⅲc層	口縁部	[1.6]	—	—	0	同輪ナデ/同輪ナデ/—	褐色	
5	かわらけ	皿	1号塚 Ⅲ層上層	口一紙	[1.5a]	—	—	0	ナデ/ナデ/—	褐色	手づくね
21	須恵器	大甕	17号塚南面C 底面直上	体部	[5.6]	—	—	0	叩き/指押スス/—	青灰色	
24	須恵器	大甕	29号清 塚北土上位	体部	[3.2]	—	—	0	不明/ナデ/—	灰白色	
27	土師器	甕	34号清 塚北土	底面	[4.3]	—	—	0	ケズリ/ナデ/木炭屑	ぶい黄褐色	
28	須恵器	甕	35号清 塚北土	体部	[3.8]	—	—	0	同輪ナデ/同輪ナデ/—	青灰色	
29	土師器	杯	36号清 塚北土	底面	[2.1]	—	—	0	同輪ナデ/同輪ナデ/同輪ナデ	褐色	
30	須恵器	大甕	36号清中央 塚北土	体部	[7.6]	—	—	0	叩き/指押スス/—	青灰色	
31	須恵器	甕	39号清西 塚北土	体部	[3.3]	—	—	0	ケズリ/ナデ/—	青灰色	
32	土師器	甕	41号塚西 塚北土	口縁部	[3.5]	—	—	0	ナデ/ナデ/—	褐色	
37	土師器	甕	F39 塚北土	口縁部	[3.2]	—	—	0	ナデ/ナデ/—	褐色	
38	かわらけ	小皿	ⅢB14c Ⅲ層	口縁部	[1.5b]	—	—	0	同輪ナデ/ナデ/—	浅黄褐色	内面無色
50	須恵器	壺	IVB14d Ⅲ層	体部	[3.6]	—	—	0	ケズリ/ナデ/—	灰色	

※計測値の「a」は残存額を示す

第6表 陶磁器観察表

展覧 No.	種類	器種	出土地点・層位	部位	計測値 (cm)			残存率 (%)		調査方法		
					全長	口径	高さ	口径	口径	内面/外面/底面	外面調査	備考
1	陶器	鉢鉢	2号土坑 Ⅱ層	体部	(5.2)	—	—	0	0	鉄輪	不明・近世品?	
2	陶器	甕	7号土坑 掘出部	口縁部	(4.1)	—	—	3	0	白磁輪	常滑・13~14C	
6	陶器	鉢	1号掘断面E南側 3c層	体部	(2.3)	—	5.6	0	100	灰輪	船場	
7	陶器	皿	1号掘断面E上位	底面	(2.3)	—	4.5	0	25	灰輪+陶磁輪、蛇ノ目彫刻	肥前	
8	陶器	皿	1号掘断面D 1層	底面	(1.5)	—	—	3	0	灰輪	肥前	磨石裏面観察
9	陶器	土野向付	1号掘断面E上位	口縁部	(2.1)	—	—	2	0	灰石輪	美濃・大塚IV~遠坂I	
10	陶器	小皿	1号掘断面E上位	口縁部	1.1~1.7	(6.6)	(5.0)	13	25	陶輪、陶磁輪(赤糸切)		
11	陶器	鉄絵鉢	1号掘断面E南側 3c層	口縁部	(5.8)	—	—	3	0	灰輪、草花文	美濃・遠坂I	L1線部変形
12	陶器	鉢	1号掘断面E南側 4a層	体部	(8.2)	—	—	7.0	0	100	灰石輪 灰輪流し掛け	不明・近世品?
22	陶器	甕	24号溝 秋田型	底面	(1.4)	—	—	0	5	無輪、内外面ナテ調整	伊豆沼・中世	
26	陶器	大甕	32号溝 秋田型	体部	(2.2)	—	—	0	0	自然輪、内外面ナテ調整	遠坂・13C	
33	陶器	志野九孔	44号溝南側 掘出部	口縁部	(2.15)	—	—	0	0	灰石輪	美濃・大塚IV~遠坂I	
34	磁器	皿	44号溝中央 1層	底面	(1.8)	—	(4.6)	0	30	透明輪、草花文	肥前・大塚IV	
35	陶器	鉢?	48号溝 東磁土	口縁部	(3.15)	—	—	3	0	陶輪、土磁ナテ調整	常滑・中世	
40	陶器	大甕	IV B 8 c 東磁土	体部	(1.5)	—	—	0	0	自然輪、内外面ナテ調整	遠坂・中世	
41	陶器	片鉢	IV B 8 c 東磁土	口縁部	(7.6)	—	—	2	0	無輪	伊豆沼・13C	径1.0~1.8cm
42	陶器	鉢鉢	II B 7 E 1層	底面	(6.1)	—	—	0	2	鉄輪?	不明・近世品?	底面外面観察
43	磁器	皿	II B 9 E Ⅱ層	底面	(2.3)	—	—	0	5	透明輪、草花文	肥前・大塚IV	磨石裏
44	磁器	皿	II B 9 E Ⅱ層	口縁部	1.1	6.0	2.5	100	100	透明輪	東北地方・近世	変形

※計測値の「」は残存率を示す

第7表 木製品観察表

展覧 No.	種類	器種	出土地点・層位	計測値				材質	備考
				全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
13	自然木		1号掘断面A南側 掘出部上	52.7	1.6	1.05	クワ	年代測定試料 No.1 (350土30 yrBP)	
14	木製品	柄	1号掘断面E北側 地層E上位	50.7	4.2	4.2	ヤカマツ		
15	木製品	柄	1号掘断面A南側	51.4	6.5	8.9	アカマツ		
16	木製品	竈高脚材	1号掘断面E北側 地層E上位	40.9	13.9	2.8	アカマツ		
17	木製品	板材	1号掘断面E北側 地層E上位	51.5	25.9	2.8	アカマツ		
18	木製品	下駄	1号掘断面E北側 地層E上	13.8	7.25	6.25	ナカカマ?	赤褐色、木作のみ測定	
19	木製品	不明	1号掘断面E北側 地層E上位	7.0	7.20	1.7	カケキ?	赤褐色、木作の一部か	
20	木製品	不明	1号掘断面E北側・地層E上位	17.15	6.50	3.55	ケヤキ?	地層E層材か	

※計測値は全て残存率

第8表 石器・石製品観察表

展覧 No.	種類	器種	出土地点・層位	計測値				石材	備考
				全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
3	石器	磨石	7号土坑 掘出部上	(10.5)	(4.95)	(10.85)	2450.0	砂岩 北上山遺跡生代新第一記	
23	石器	石錘	26号溝 埋藏土	(2.42)	1.18	0.42	0.9	頁岩 奥羽山脈新生代新第一記	
25	石器	石錘	30号溝 北端 埋藏土	(2.81)	1.37	0.45	1.0	頁岩 奥羽山脈新生代新第二記	
36	石器	石錘	P20 埋藏土	2.2	1.59	0.43	1.0	頁岩 奥羽山脈新生代新第三記	
45	石器	石錘	IV B 6 c Ⅱ層上位	(1.83)	(1.66)	0.28	0.7	地質頁岩 奥羽山脈新生代新第三記	
46	石器	石錘	Ⅱ B 8 a Ⅱ層	(2.5)	(1.58)	0.5	1.4	頁岩 奥羽山脈新生代新第一記	
47	石器	砥石	IV B 6 c Ⅱ層	(4.5)	(6.6)	(17.45)	332.4	凝灰岩 奥羽山脈新生代新第一記	
48	石器	石臼	調査区北端 1層	(16.0)	(21.6)	13.7	3250.0	花崗閃緑岩 北上山遺跡生代新第一記	

※計測値の「」は残存率を示す

第9表 金属製品観察表

展覧 No.	種類	器種	出土地点・層位	計測値			備考	
				全長 (cm)	幅 (cm)	重量 (g)		
49	鉄製品	鍔	IV B 6 c Ⅱ層	(4.3)	2.0	0.4~0.6	7.7	
50	銅製品	鉄片	調査区南側 1層	(2.1)	2.3	0.1	3.5	鉄、昭和11年
51	鉄片	鉄片	3号溝 埋藏土上位	—	—	—	84.8	2点、遺棄品、河原田製
52	鉄片	鉄片	31号溝 埋藏土	—	—	—	92.6	1点、遺棄品、写白磁輪

※計測値の「」は残存率を示す

Ⅵ 自然科学分析

1 木製品樹種同定

吉川純子（古代の森研究会）

(1) はじめに

五輪堂遺跡は一関市花泉町の金流川右岸の河岸段丘上に位置する遺跡で、古代の土坑や中～近世の堀などが検出されている。中～近世の堀（1号堀）からは杭や下駄など当時利用していた木材が確認された。そこで当時の木材利用を調査するため6試料の同定を行った。試料からは剃刀で横断面、放射断面、接線断面の切片を作製しガムクロラルで封入し生物顕微鏡で観察・同定を行った。

(2) 同定結果

出土した木材の同定結果を表1に示す。以下に木材解剖学的記載を行う。

アカマツ (*Pinus densiflora* Sieb. et Zucc.) 早材から晩材への移行は急で晩材部が多い針葉樹。垂直・水平ともに樹脂道は大きい。放射仮道管の内壁は鋸歯状に突出し放射柔細胞の壁孔は窓状である。

クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) 年輪のはじめに大きな道管が2-3列集合し、その後径が急減して火炎状に小管孔が配列する環孔材。道管の穿孔板は単一で放射組織は単列で同性である。

ナナカマド属 (*Sorbus*) やや小さい管孔がほぼ単独で年輪内に散在し、年輪のおわりでやや径を減じる散孔材。道管の穿孔板は単一で道管内にらせん肥厚があり、放射組織はほぼ同性で1-2細胞幅、単列部がやや長いものがある。

サクラ属 (*Prunus*) 2-6個のやや小さい管孔が斜めないし塊状に連結して年輪内に散在する散孔材。晩材部で管孔はやや小さくなる。道管の穿孔板は単一で道管内にはらせん肥厚がある。放射組織は3-4細胞幅で異性である。

(3) 考察

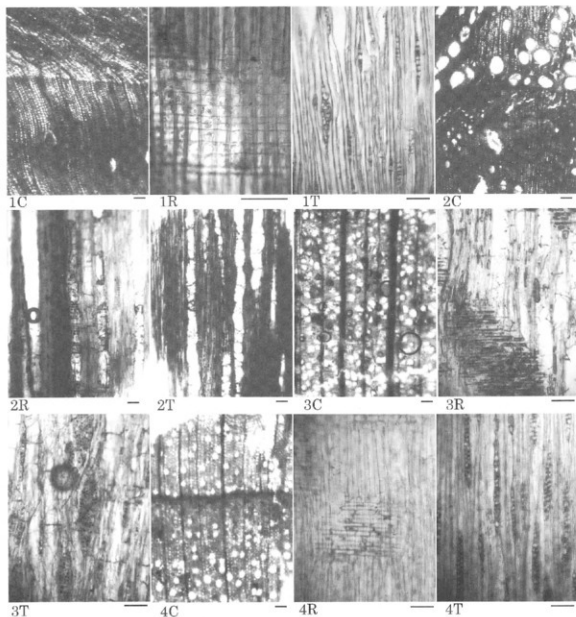
1号堀から出土した下駄1点（掲載No.18、以下掲載番号）はナナカマド属であった。下駄は16～17世紀頃にはモクレン属をはじめとした広葉樹材が用いられ、菌には強度のあるケヤキなど異なる樹種を使用する方法が広範囲で見受けられる（山田1993）。また、この頃にはケヤキやクリのような高木だけでなく灌木など複数の広葉樹を使用する傾向がある。本遺跡でも東北に特有のナナカマド属を下駄材として利用していることから、当時こうした人間と周辺植物との関係が強まったと考えられる。そして建築部材や杭などは5試料のうち3試料がアカマツであった（15～17）。アカマツの他には杭にクリ（13）、サクラ属（14）が利用されており、当時周辺で調達できる用材を用いていたと言えることも考えられる。東北地方ではマツ属は15世紀頃までは利用頻度がそれほど多くないが16世紀に入って板材などで利用例が多くなる傾向にある。

引用文献

山田昌久、1993、日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成一用材から見た人間・植物関係史、植生史研究特別第1号、植生史研究会、1-214。

表1 1号塚から出土した加工材の樹種

掲載No.	器種	地点	層位	樹種	登録No.
18	下駄	断面E北側	堆積土	ナナカマド属	701
16	建築部材	断面E北側	堆積土上位	アカマツ	702
13	杭	断面A南側	底面直上	クリ	703
17	板材	断面E北側	堆積土上位	アカマツ	704
14	杭	断面E北側	堆積土上位	サクラ属	707
15	杭	断面A南側		アカマツ	708



図版1 五輪堂遺跡出土木材の顕微鏡写真

1.アカマツ (16) 2.クリ (13) 3.サクラ属 (14) 4.ナナカマド属 (18)

C:横断面、R:放射断面、T:接線断面、スケールは0,1mm

2 放射性炭素年代測定 (AMS測定)

(株)加速器分析研究所

(1) 測定対象試料

五輪堂遺跡は、岩手県一関市花泉町字五輪堂14-1 (北緯39° 52' 40"、東経141° 12' 24") に所在する。測定対象試料は、1号堀出土木片 (1:IAAA-92178)、43号溝出土木炭 (2:IAAA-92179)、7号土坑出土木炭 (3:IAAA-92180)、35号溝出土木炭 (4:IAAA-92181)、合計4点である。

(2) 測定の意義

出土遺物が乏しい遺構の年代を決定する根拠とする。

(3) 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) 酸処理、アルカリ処理、酸処理 (AAA: Acid Alkali Acid) により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸 (80℃) を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液 (80℃) を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaAと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸 (80℃) を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- 3) 試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素 (CO₂) を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出 (水素で還元) し、グラファイトを作製する。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

(4) 測定方法

測定機器は、加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置 (NEC社製) を使用する。測定では、米回国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

(5) 算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期 (5568年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。
- 2) ¹⁴C年代 (Libby Age: yrBP) は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。この値は、 $\delta^{14}\text{C}$ によって補正された値である。¹⁴C年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- 3) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰) で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定した場合には表中に (AMS) と注記する。
- 4) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。
- 5) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal04データベース (Reimer et al 2004) を使い、OxCalv4.1較正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

(6) 測定結果

五輪堂遺跡出土試料の ^{14}C 年代は、1号堀出土木片1が $850 \pm 30\text{yrBP}$ 、43号溝出土木炭2が $890 \pm 30\text{yrBP}$ 、7号土坑出土木炭3が $330 \pm 30\text{yrBP}$ 、35号溝出土木炭4が $16810 \pm 520\text{yrBP}$ である。1と2は誤差 ($\pm 1\sigma$) の範囲で重なる部分を持ち、近い年代と考えられる。暦年較正年代 (1σ) は、1が12世紀後半から13世紀前葉頃、2が12世紀後半から13世紀初頭頃、3が16世紀末から17世紀前葉の範囲で示される。4は旧石器時代に相当する値を示した。

炭素含有率はいずれも50%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-92178	1	酒槽: 1号堀 層位: 底面直上	木片	AAA	-28.35 \pm 0.55	850 \pm 30	89.97 \pm 0.32
IAAA-92179	2	遺構: 43号溝 層位: 堆積土中位	木炭	AAA	-26.29 \pm 0.58	890 \pm 30	89.53 \pm 0.32
IAAA-92180	3	遺構: 7号土坑 層位: 3層	木炭	AAA	-24.97 \pm 0.77	330 \pm 30	95.96 \pm 0.34
IAAA-92181	4	遺構: 35号溝 層位: 堆積土	木炭	AAA	-28.30 \pm 0.74	46,810 \pm 520	0.29 \pm 0.02

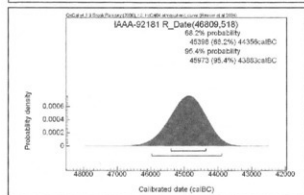
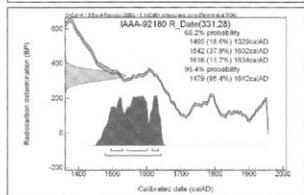
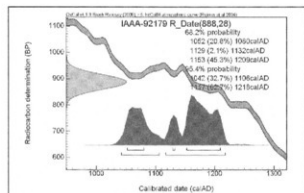
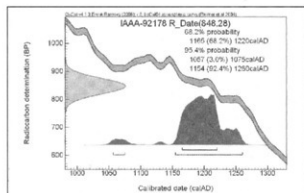
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-92178	900 \pm 30	89.36 \pm 0.30	848 \pm 28	1165 AD - 1220 AD (68.2%)	1057 AD - 1075 AD (3.0%) 1154 AD - 1260 AD (92.4%)
IAAA-92179	910 \pm 30	89.29 \pm 0.30	888 \pm 28	1052 AD - 1080 AD (20.8%) 1129 AD - 1132 AD (2.1%) 1153 AD - 1209 AD (45.3%)	1042 AD - 1106 AD (32.7%) 1117 AD - 1218 AD (62.7%)
AAA-92180	330 \pm 30	95.97 \pm 0.30	331 \pm 28	1495 AD - 1529 AD (18.6%) 1542 AD - 1602 AD (37.9%) 1616 AD - 1634 AD (11.7%)	1479 AD - 1642 AD (95.4%)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年校正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-92181	46,860 \pm 5200	0.29 \pm 0.02	46,809 \pm 518	45398 BC - 44356 BC (68.2%)	45973 BC - 43883 BC(95.4%)

[参考値]

参考文献

- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19, 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37 (2) , 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the radiocarbon calibration program, Radiocarbon 43 (2A) , 355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43 (2A) , 381-389
- Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058



[参考] 暦年校正年代グラフ

Ⅶ 調査のまとめ

今回の調査では縄文～近世に属する時期の遺構・遺物を検出した。最後に過去の調査も含めて時代ごとに検討を加えることで調査のまとめとしたい。

1 縄文時代

今回の調査ではこの時期の遺構は見つかっていないが、遺物としては石鏃が出土している(23・25・36・45・46)。過去に実施された県埋蔵文化財センターの調査(以下、県埋文調査)及び町教育委員会の調査(以下、町教委調査)でも遺構は検出されていないが、ともに石鏃が出土しているなど今回の調査区と同様の状況であった。明確な遺構が無いため判然としないが、本遺跡は金流川沿いに位置していることもあり、おそらく縄文時代には川に水を飲みに来る動物を捕まえる為の狩猟場として利用されていたものと考えられる。

2 古代～中世

本遺跡において主体となる時期であり、過去の調査でも最も遺構・遺物の出土量が多い時代である。本来的には古代と中世それぞれの時代について検討を加えるべきではあるが、遺構については出土遺物が少ないことから厳密に所属時期を区別することができないものが多いこと、また分析結果等で両者の移行期にあたるものも存在すると考えられることから、今回は古代～中世という長い期間のなかでの検討を行う。

この時期に属する可能性がある遺構としては土坑2基・堀1条・溝18条がある(第23図)。特に特徴的なのは堀跡(1号堀)である。この堀は、前述の通り断面形及び堆積土の状況から2時期に渡って掘削が行われたと考えられるものであることから、ここで埋没・掘削の過程について少し詳しく見ていくことにしたい(第25図)。

南端付近の断面形をみると、底面の狭い逆台形状のプランの堀が埋没した後に底面の広い逆台形状のプランの堀が掘削されている状況が確認できた(第8図断面A)。また、北側では堀が二股に分岐し、堆積土の状況から一方のプランが埋没した後にもう一方が掘削されている状況を確認できた。この堀は一定期間滞水・流水していた可能性が高いと考えられるが、水の作用のみで底面がこのような状態になるとは考え難く、堆積土の状況を見ても一度埋没した堀を再度掘削したものと考えた方が妥当であろう。北西端付近についても同様と考えられるが、この地点は近～現代の水田耕作時に掘りあげられ、さらに杭が列状に打ち込まれていた為堀の痕跡はほとんど残っていなかった。

掘削年代については年代測定結果と出土遺物を根拠として考えたい。まず古段階の堀であるが、断面A付近で出土した自然木(13)の年代測定結果が $850 \pm 30 \text{yrBP}$ (13世紀前葉)とされていることと8層中から出土したかわらけ(5)が12世紀後半に属するものであることから、古段階については13世紀前葉頃から埋没を開始したものと考えられる。一方、新段階の堀については、近世～近代に属する陶磁器や木製品が出土していることから近世以降に埋没したものと考えられる。

性格・用途については、堆積土が水成堆積であり一定期間滞水していた可能性を考慮すると導水施設の可能性がある。ただし、同様に導水施設と考えられる他の溝と比較しても規模が大きく異なることから、それとは異なる性格を有する可能性もある。導水以外の用途としては区画(防御?)用とし

での機能が想定され、とくに古段階の堀については集落や建物域を区画する為に掘削された堀の可能性もある。ただし、今回の調査では堀の周辺はおろか調査区全域をみても建物跡は検出されていない為、それについては推定の域を出ない。

堀以外の遺構としては溝と土坑がある。このうち過去の調査分も含めて最も多く検出されている遺構が溝である。この時期に属する溝は、直線的に走るもので断面形が逆台形となるものが多い。出土遺物は少ないが、堆積土中に炭化物を含む溝が数条確認されており、このうち35号溝と43号溝の2条から出土した炭化物について放射性炭素年代測定を実施した。測定結果は、43号溝出土試料が890±30yrBP（12世紀後半～13世紀初頭）、35号溝出土試料が46810±520yrBPであった。35号溝出土試料については前期旧石器時代に相当する年代が考えられているが、両者とも炭素含有率は50%以上あり処理上の問題は無いということである（註）。このことから、少なくとも43号溝については13世紀初頭までに埋没しており、前述した1号堀古段階と埋没時期が同時期と考えられる。遺物としても1号堀から12世紀後半と考えられる手づくねかわらけが出土していることから、本遺跡が古代末から中世前期にかけて溝や堀を掘削して区画を行うなどの土地利用が行われていたことがわかる。ただし、この他の遺構で明確にこの時期と判断できるものはほとんど無い為、遺跡全体がどのように利用されていたかについては不明と言わざるを得ない。

出土遺物には土器類（土師器・須恵器・かわらけ）、国産陶器、鉄製品等がある。土器類には全形がわかる資料は無いが、土師器・須恵器は平安時代に属すると思われる。かわらけも小破片であるが、5は二段のナデ調整が施される手づくねかわらけであり、12世紀後半の製作と考えられる。国産陶器には湯美窯産、常滑窯産、伊豆沼窯産の可能性がある製品があるが、いずれも小破片であるため器形や年代の判断が困難である。常滑窯産陶器には甕の口縁部があり（2）、口縁部の特徴から13～14世紀代の製作と考えられる。22と41については外面の色調などから伊豆沼窯産の可能性があると判断したが、伊豆沼窯は窯本体の調査事例が少なく不明な点が多い窯である為（藤沼2010）、これについては産地を含めて検討を要する。ただし、今回は伊豆沼窯産製品と仮定して年代は窯の操業年代である13世紀前半頃と想定しておきたい。

過去の調査についても簡単に記しておきたい。平成16年度に実施された塚埋文の調査では古代の遺構として堅穴住居3軒、堅穴状遺構4軒、掘立柱建物1棟等が検出されており、出土土器の検討から8世紀末から10世紀に属すると考えられている（塚埋文447集）。中世の遺構としては方形に巡る堀があり、調査区内からは13世紀に属すると考えられる常滑窯産陶器の破片が出土している。今回の調査区に近い花泉町教育委員会の調査区では土坑と溝が検出されている（花泉町教委2004）。削平の状況も含めて今回の調査区と検出状況は類似しており、年代が明確な遺構は少ない。

この他、本遺跡においては建立年代が13世紀後半と考えられる鉄製五輪塔地輪があり、国産陶器の中には五輪塔と同時期と考えられるものがある。残念ながら今回の調査では明確に13世紀代に機能していたといえる遺構は確認できなかったが、同時期の遺物が調査区を越えて出土しているという事実は、この時期に本遺跡内で何らかの行為が行われていたことの証明であり、遺物の出土しなかった遺構の中にこの時期に属するものが含まれている可能性がある。

3 近世～近代

陶磁器の出土から近世に属すると考えられる遺構としては堀1条と溝3条、土坑3基がある（第24図）。1号堀については2時期に亘って掘削されていることは前述の通りである。本来の規模が不明

であるが推定の域を出ないが、滞水・流水していたことを考慮すると堰のような導水施設としての機能を有していた可能性もある。

溝のうち、44・47号溝は一端が終息していることから、滞水ではなく区画の為に掘削された溝と考えられる。ただし、いずれの溝も底面や堆積土の状況から一定期間滞水していたものと考えられる。また、重複関係から近世以降に属すると考えられるものに41号溝や46号溝などがある。

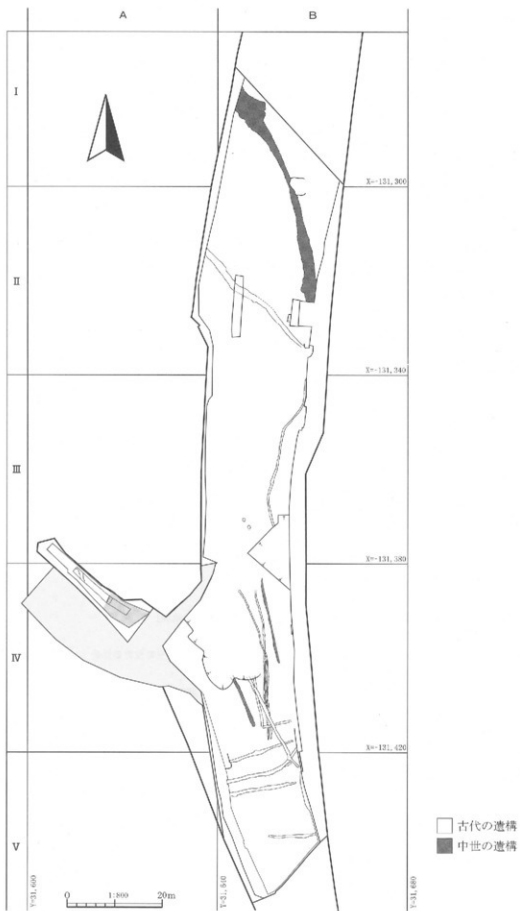
土坑のうち、7号土坑については3層出土炭化物の年代測定結果から近世前期（17世紀前葉）に属すると考えられる。また、形状・堆積土が類似する4号土坑もこの時期に属する可能性があるが、両者ともその性格については不明である。この他、近世後期（18世紀以降）には墓の可能性のある大型の土坑（2号土坑）が掘削されており、近世に入っても散発的ながら土地利用が行われていたことがわかった。

この他にも今回の調査では時期不明とした土坑や溝が数多く見つかっている。他遺構との重複関係から近世以前あるいは以降と判断しても良い遺構もあるが、出土遺物が乏しく断定できないものがほとんどである。

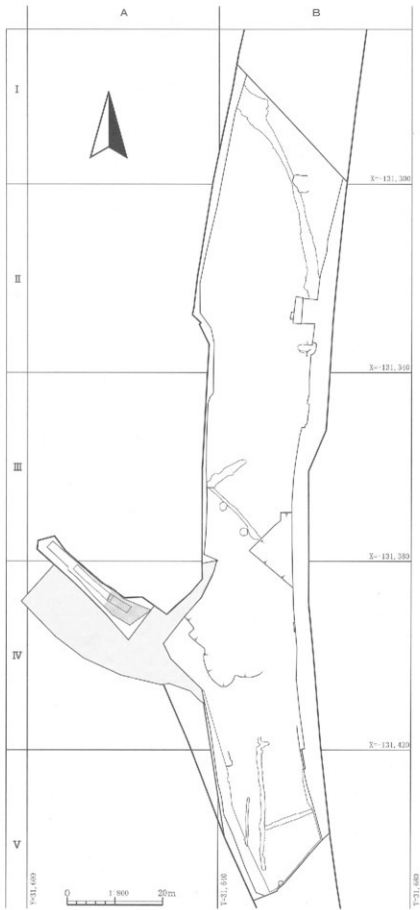
註 35号溝出土土料について依頼先である(株)加速器分析研究所に問い合わせたところ、本試料については周辺土壌（地山）中に含まれていた炭化物が根の浸食・攪拌などの自然環境の作用によって堆積土中に混入した可能性があり、35号溝の掘削・埋没時期に形成されたものではない可能性が高いとのことであった。

参考文献（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書は原刊文〇集と略記）

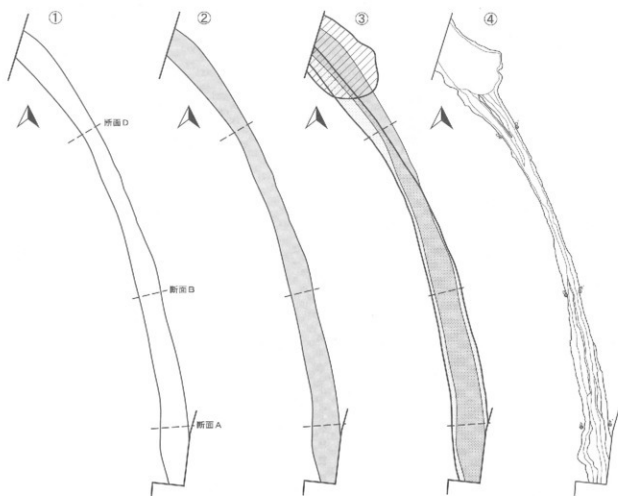
- 一関市教育委員会 2007a 『一関市花泉町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ（永井・老松地区）』
- 一関市教育委員会 2007b 『千塚遺跡発掘調査報告書』
- 一関市教育委員会 2008a 『一関市花泉町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ（日影・金沢地区）』
- 一関市教育委員会 2008b 『一関市花泉町遺跡地区』
- 岩手県教育委員会 1986 『岩手県中世城館跡分布調査報告書』岩手県文化財調査報告書第82集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1999 『千塚遺跡発掘調査報告書』原刊文297集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004 『五輪堂遺跡発掘調査報告書』原刊文447集
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2010 『中村城跡発掘調査報告書』原刊文560集
- 岩手日日新聞社 2003 『絵で見る古里—一関輝村絵図』
- 草間俊一・金子清昌 1971 『貝島貝塚』花泉町教育委員会
- 田辺健一 1952 『北上川中流の狐禅寺峡谷の成因に関する若干の考察』『東北地理』4
- 中世十器研究会 1995 『概説 中世の十器・陶磁器』真陽社
- 東北大学文学部考古学研究室 1997 『岩手県花泉町 中神遺跡の調査』岩手県花泉町教育委員会
- 東北中世十器研究会 2003 『中世奥羽の十器・陶磁器』高志書院
- 中川久夫ほか 1963 『北上川中流沿岸の第四系および地形—北上川流域の第四紀地史（2）—』『地質学雑誌』69
- 花泉町教育委員会 1993 『花泉遺跡』
- 花泉町教育委員会 1998 『寺沢遺跡発掘調査報告書』
- 花泉町教育委員会 2003 『因田市場遺跡発掘調査報告書』
- 花泉町教育委員会 2004 『五輪堂遺跡発掘調査報告書』
- 花泉町教育委員会 2005a 『中村城跡発掘調査報告書』
- 花泉町教育委員会 2005b 『花泉町遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ（涌津・油島・花泉地区）』
- 藤沼邦彦 2010 『陸奥国（宮城縣）水沼藩・伊豆沼藩・二本木藩・白石藩』『古陶の譜 中世のやきもの—六古窯とその周辺—』MIHO MUSEUMほか
- 梅原敏昭・飯村均輝 2002 『鎌倉・室町時代の奥州』高志書院



第23図 遺構変遷図（古代～中世）



第24図 遺構変遷図 (近世)



断面A



断面B



断面D



第25図 1号堀の変遷模式図

写 真 图 版



調査区遠景（東から）



調査区中央調査前（南から）



調査区中央調査前（南西から）



調査区南端調査前（南東から）



南西調査区調査前（南東から）

写真図版1 調査区の状況（1）



調査区中央航空写真（直上）

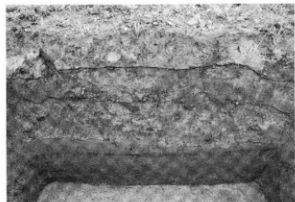


調査区南端終了全景（北西から）

写真図版 2 調査区の状況（2）



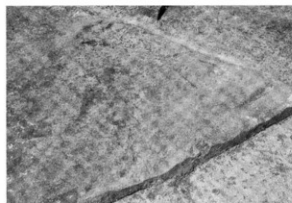
南西調査区終了全景（西から）



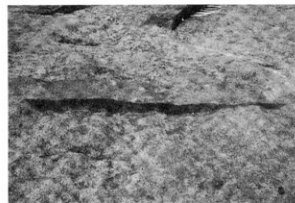
基本層序（西から）



IVB 4 a付近試掘トレンチ（南から）



1号土坑完掘（東から）



1号土坑断面（東から）

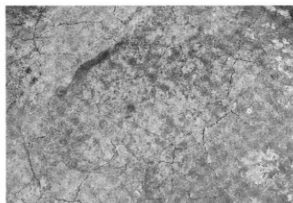


2号土坑完掘（西から）

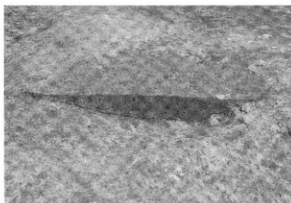


2号土坑断面（南西から）

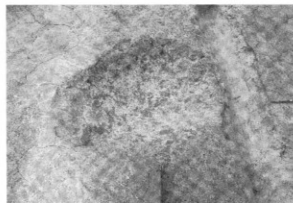
写真図版3 調査区の状況（3）、基本層序、1・2号土坑



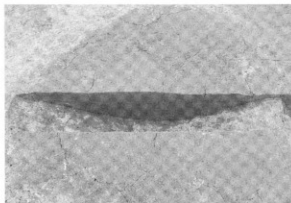
3号土坑完掘（南から）



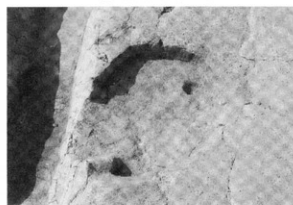
3号土坑断面（南から）



4号土坑完掘（南東から）



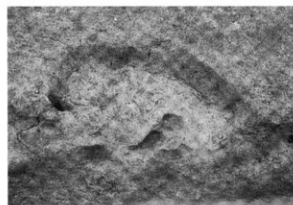
4号土坑断面（南東から）



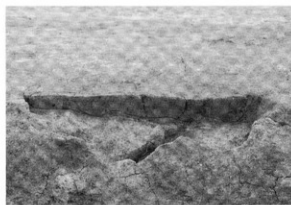
5号土坑完掘（南東から）



5号土坑断面（南東から）

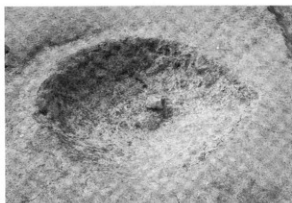


6号土坑完掘（南から）

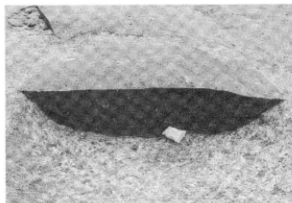


6号土坑断面（南西から）

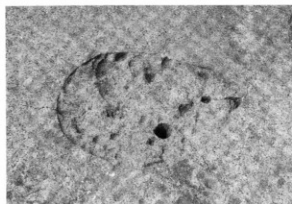
写真図版 4 3～6号土坑



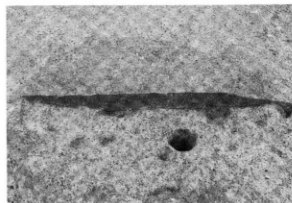
7号土坑完掘 (南東から)



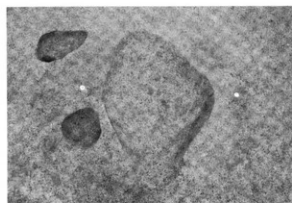
7号土坑断面 (東から)



8号土坑完掘 (南から)



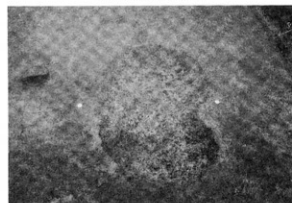
8号土坑断面 (南から)



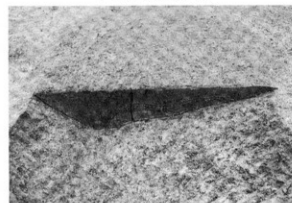
9号土坑完掘 (南から)



9号土坑断面 (南から)



10号土坑完掘 (南から)



10号土坑断面 (南から)



完掘 (南から)



南側完掘 (北から)



中央完掘 (南から)

写真図版 6 1号堀 (1)



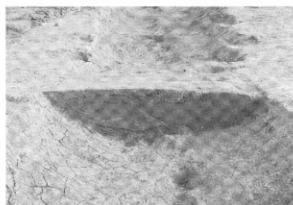
北端杭列 (南東から)



分析試料No. 1 出土 (南から)



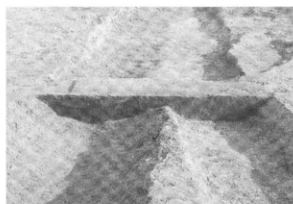
断面A (北から)



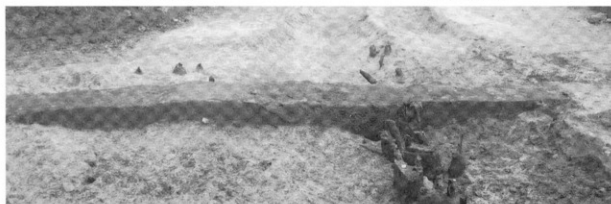
断面B (北から)



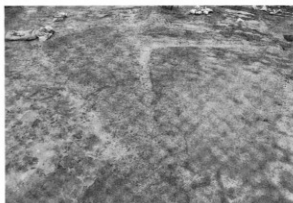
断面C (北から)



断面D (北から)



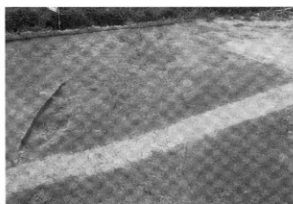
断面E (北西から)



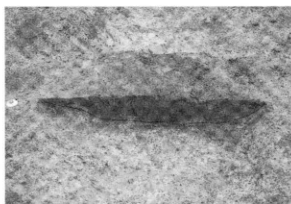
1号溝完掘（南から）



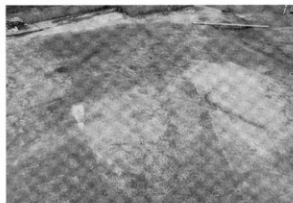
1号溝断面B（東から）



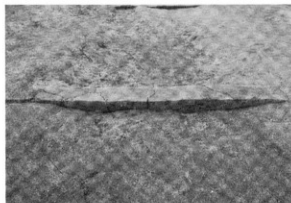
2号溝完掘（1）（東から）



2号溝断面A（東から）



2号溝完掘（2）（西から）



2号溝断面B（東から）

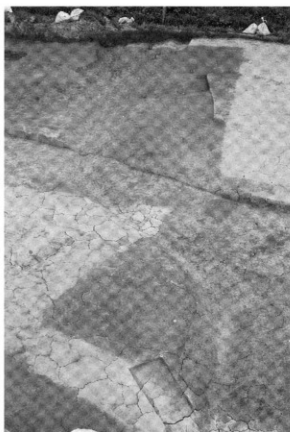


3・4号溝完掘（北西から）

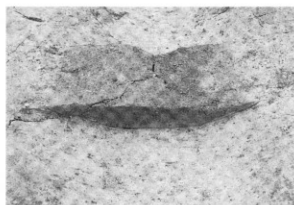


4号溝完掘（東から）

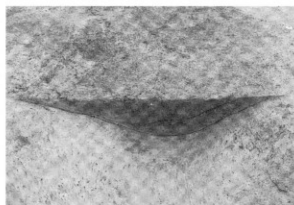
写真図版 8 1～4号溝



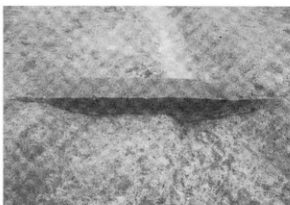
3・5号溝完掘（北東から）



3・4号溝断面A（南から）



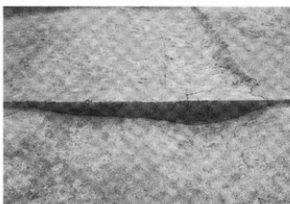
3・4号溝断面B（西から）



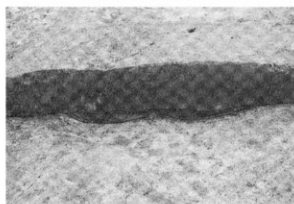
3・4号溝断面D（東から）



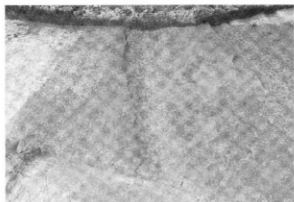
3・4号溝断面E（北東から）



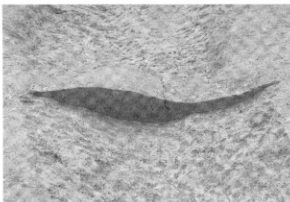
3・4号溝断面F（東から）



5号溝断面（東から）



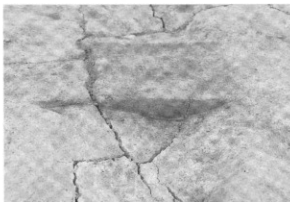
6号溝完掘（東から）



6号溝断面（東から）



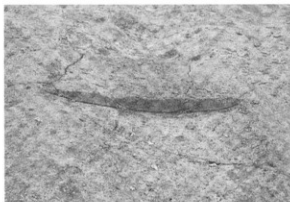
7号溝完掘（西から）



7号溝断面（西から）



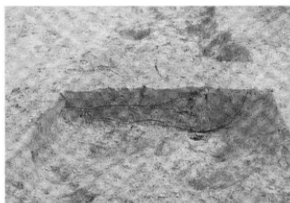
8号溝完掘（南東から）



8号溝断面A（西から）

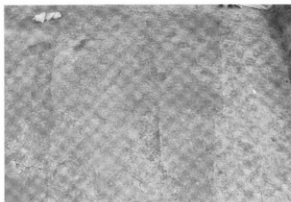


9号溝完掘（南東から）

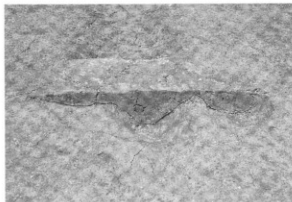


9号溝断面（北西から）

写真図版10 6～9号溝



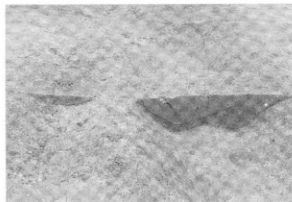
10号溝完掘 (南から)



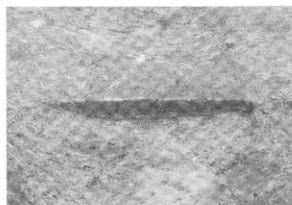
10号溝・P39断面 (南から)



11号溝完掘 (南東から)



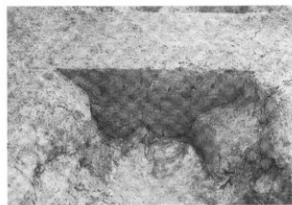
11号溝断面A (南東から)



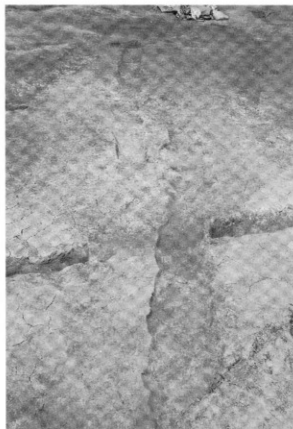
11号溝断面B (南東から)



14号溝完掘 (北から)



14号溝断面 (北から)



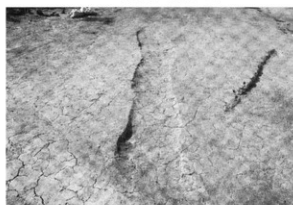
12・13号溝完掘（南東から）



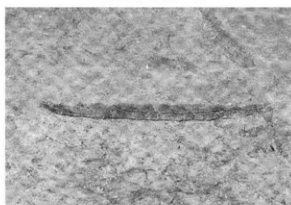
12号溝断面（南東から）



13号溝断面（南東から）



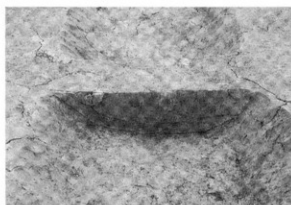
15号溝完掘（南東から）



15号溝断面（南東から）



16号溝完掘（北西から）



16号溝断面（北西から）

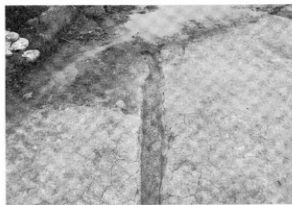
写真図版12 12・13・15・16号溝



17号溝完掘 (南から)



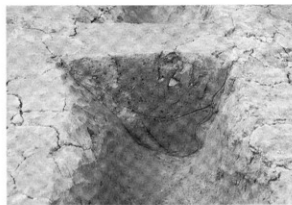
17号溝北側完掘 (南西から)



17号溝南端完掘 (北から)



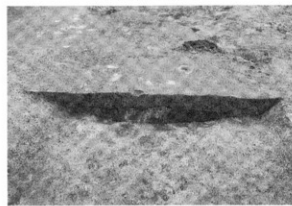
17号溝断面A (南から)



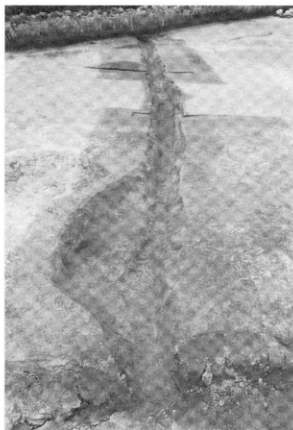
17号溝断面B (南から)



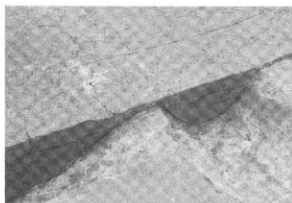
18号溝完掘 (北東から)



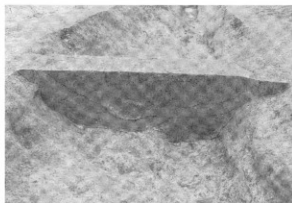
18号溝断面 (北東から)



19号溝完掘 (南東から)



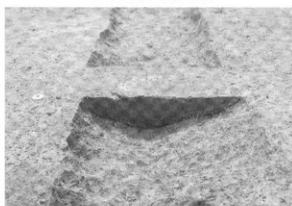
4号土坑・19号溝断面A (南東から)



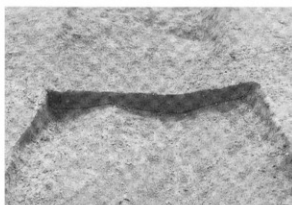
19号溝断面C (南東から)



20・21号溝完掘 (東から)



20号溝断面 (東から)

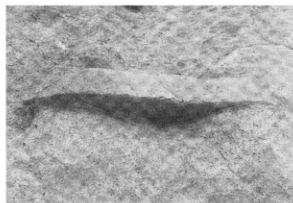


21号溝断面 (東から)

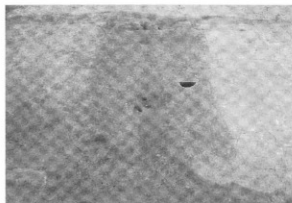
写真図版14 19～21号溝



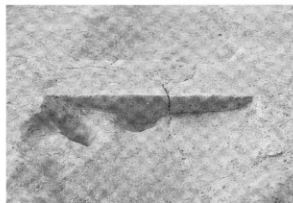
22号溝完掘（東から）



22号溝断面（東から）



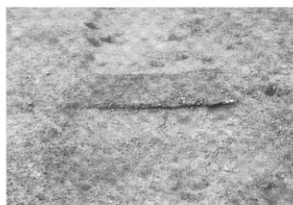
23号溝完掘（南から）



23号溝断面（南から）



24号溝完掘（北から）



24号溝断面A（南から）



28号溝完掘（東から）



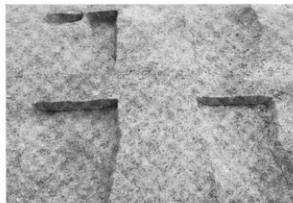
28号溝断面（東から）



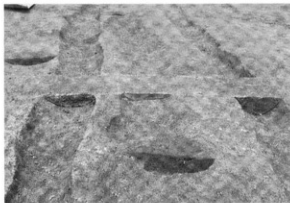
25～27号溝実掘(1)(北から)



25～27号溝実掘(2)(北から)



25・26号溝断面A(南から)



25～27号溝断面B(南から)

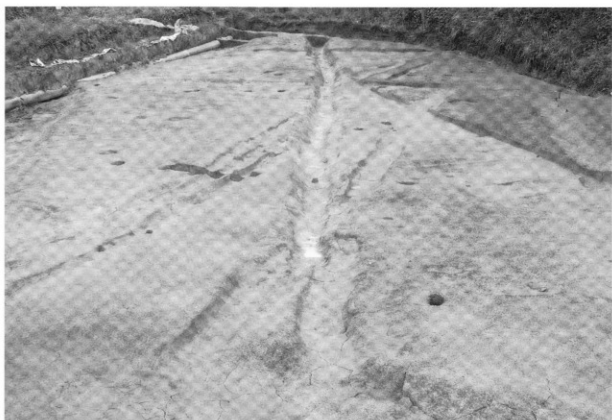


25・26号溝断面C(南から)



25～27号溝検出(北から)

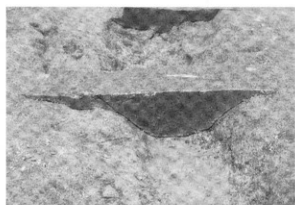
写真図版16 25～27号溝



29～31号溝完掘（北西から）



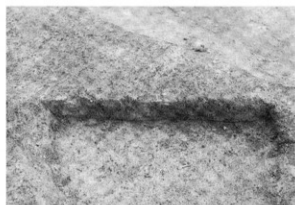
29号溝断面B（南東から）



29・30号溝断面C（南東から）



29・30号溝断面D（南東から）



30号溝断面（南から）

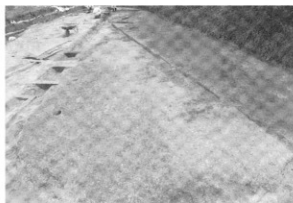
写真図版17 29～31号溝



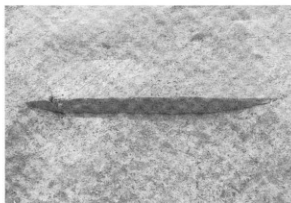
29号溝南端完掘 (北西から)



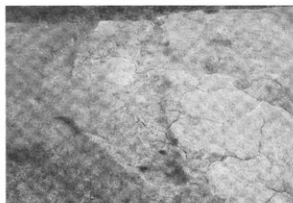
29～32号溝検出 (北西から)



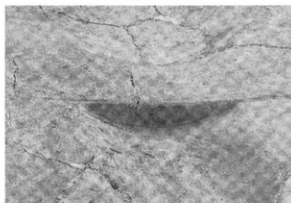
32号溝完掘 (北から)



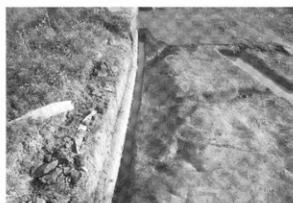
32号溝断面B (南から)



33号溝完掘 (東から)



33号溝断面 (東から)



34号溝完掘 (北から)



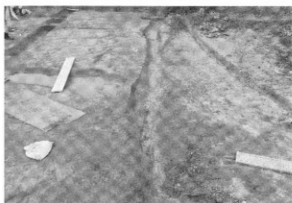
34号溝断面 (北から)



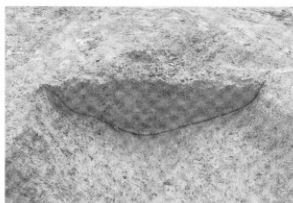
35号溝完掘(1) (東から)



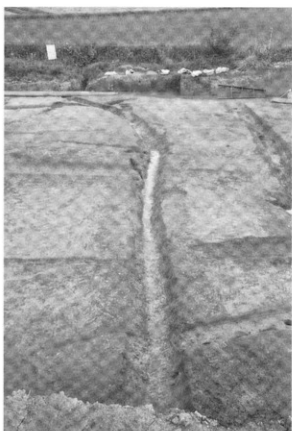
35号溝断面A (東から)



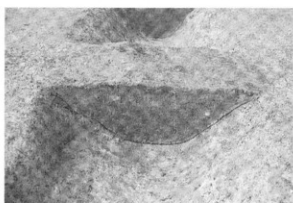
35号溝完掘(2) (東から)



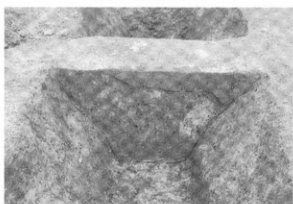
35号溝断面B (東から)



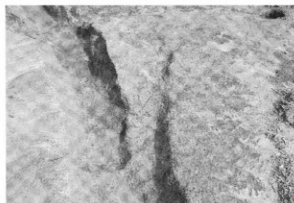
36号溝完掘 (西から)



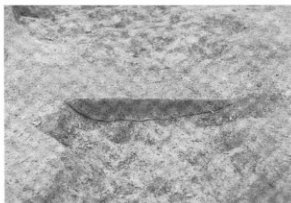
36号溝断面A (東から)



36号溝断面B (南西から)



37号溝完掘 (西から)



37号溝断面 (西から)



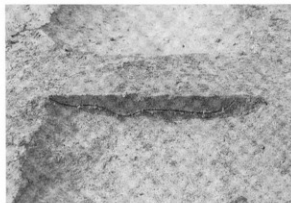
38号溝完掘 (東から)



38号溝断面 (東から)



39・40号溝完掘 (南から)

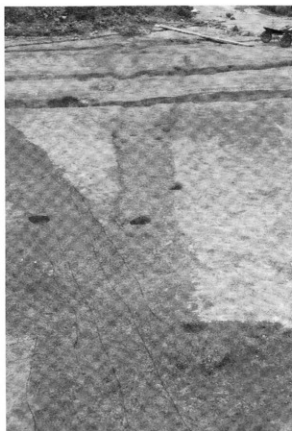


39号溝断面 (南東から)



40号溝断面 (南東から)

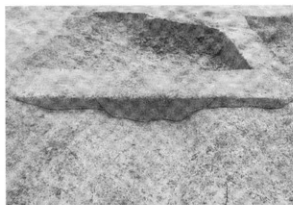
写真図版20 37～40号溝



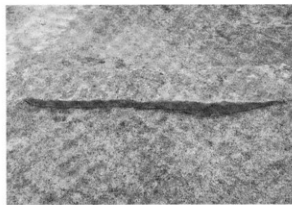
41号溝完掘 (南から)



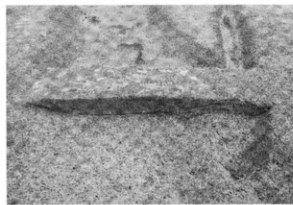
42号溝完掘 (北から)



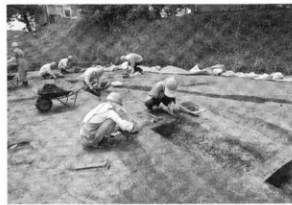
39~41号溝断面D (南から)



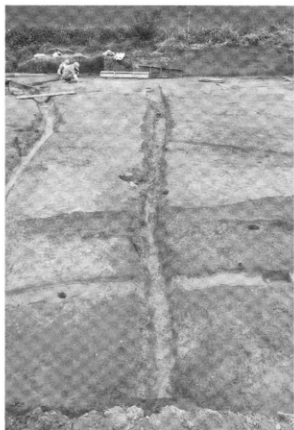
41・42号溝断面E (北から)



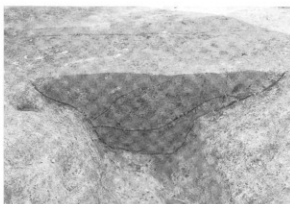
41号溝断面F (南から)



作業風景 (1)



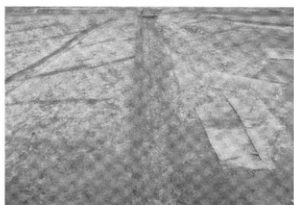
43号溝完掘（西から）



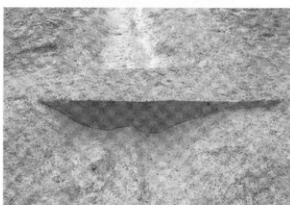
43号溝断面（東から）



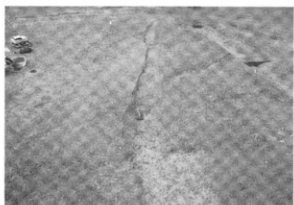
43号溝分析試料No.2出土（北西から）



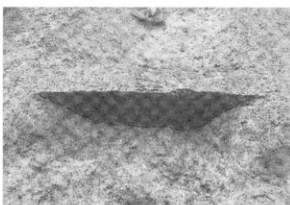
44号溝完掘（東から）



44号溝断面（東から）



45号溝完掘（東から）

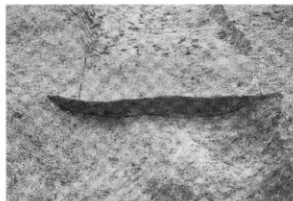


45号溝断面A（東から）

写真図版22 43～45号溝



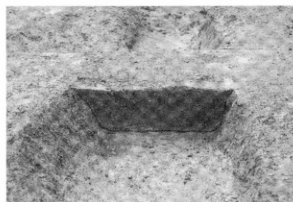
46号溝完掘（北西から）



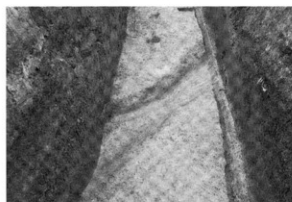
46号溝断面A（北から）



47号溝完掘（北から）



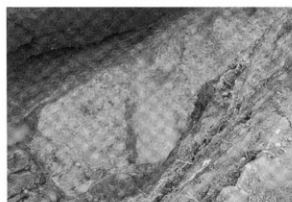
47号溝断面（北から）



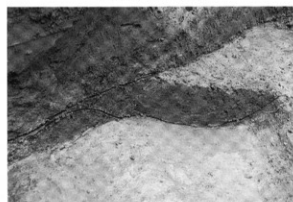
48号溝完掘（西から）



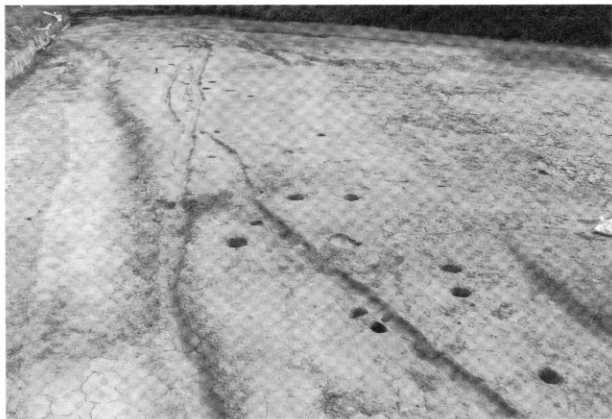
48号溝断面（南から）



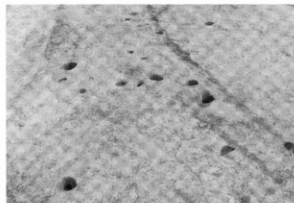
49号溝完掘（北から）



49号溝断面（南から）



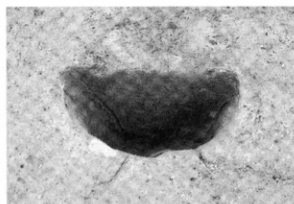
調査区中央柱穴群 (1) (北から)



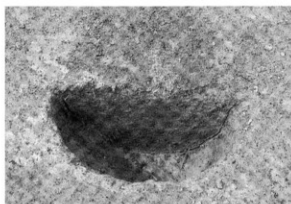
調査区中央柱穴群 (2) (北西から)



南西調査区柱穴群 (西から)

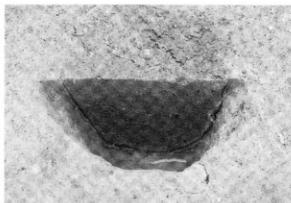


P07 (東から)

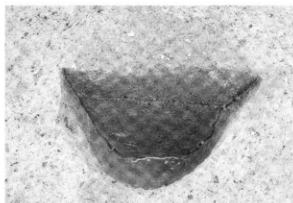


P17 (南から)

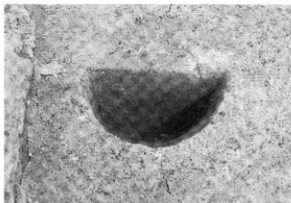
写真図版24 柱穴 (1)



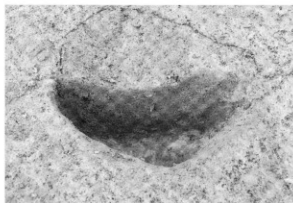
P34 (南から)



P35 (東から)



P49 (南から)



P61 (東から)



南西調査区旧河道 (東から)



調査終了全景 (北から)



作業風景 (2)

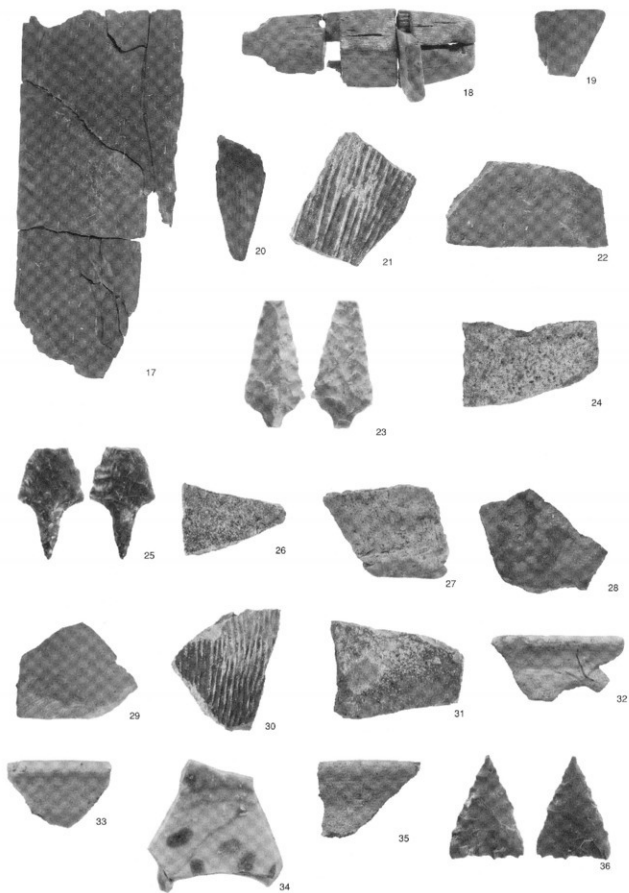


作業風景 (3)

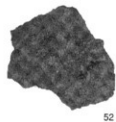
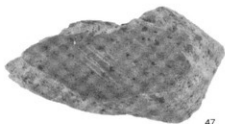
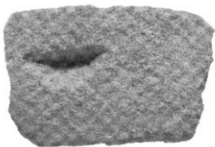
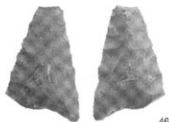
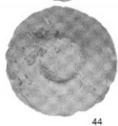
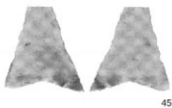
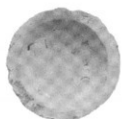
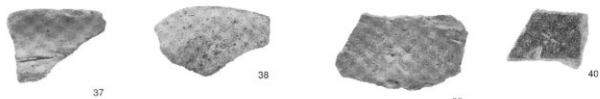
写真図版25 柱穴 (2)、その他



写真図版26 出土遺物(1)



写真図版27 出土遺物（2）



写真図版28 出土遺物(3)

報告書抄録

ふりがな	ごりんどういせきはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	五輪堂遺跡発掘調査報告書							
副書名	一般国道342号花泉バイパス道路改築事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業同埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第582集							
編著者名	村田 淳							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業同埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2011年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		山町村	遺跡番号	° ° °	° ° °			
五輪堂遺跡	岩手県一関市花 泉町字五輪堂 14-1ほか	03215	OE38-2093	39度 52分 40秒	141度 12分 24秒	2009.07.01 ～ 2009.10.09	4,680㎡	一般国道342号 花泉バイパス 道路改築事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
五輪堂遺跡	集落跡	縄文時代 古代 中世 近世(以降)	土坑2基 溝18条 堀1条 溝2条 土坑7基 溝31条 柱穴65個	石鏡 土師器・須恵器 鉄鏡 かわらけ・磁石・ 陶器(瀬美・常 滑・伊豆沼?) 近世陶磁器・石臼 木製品(下駄・杭)		中～近世に属する全長 50m近い大規模な堀と 渥美窯産・常滑窯産・ 伊豆沼窯産と考えられ る陶器が出土。		
要約	<p>今回の調査区は、遺跡範囲の西端及び一部その外側に位置しており、昭和30年代以降に行われた圃場整備により調査区全域が大幅に埋平されていた。検出した遺構は、土坑・堀・溝・柱穴で出土遺物及び重複関係から古代・中世・近世(以降)に属するものが確認できた。なかでも調査区北端で検出した中～近世に属する堀は全長50m以上、上面幅2.5m以上と推定される大規模なもので、埋没後再度掘り返されている状況が確認できた。この他、調査区南側では東西方向に平行して掘削されている古代の溝、調査区中央では常滑窯産陶器片が出土した中世末～近世の土坑などを検出している。</p> <p>出土遺物のうち土器・陶磁器類は摩耗した小破片が多いが、なかにはかわらけ・常滑窯産陶器・伊豆沼窯産の可能性のある陶器片口縁など古代末～中世に属する遺物が含まれる。</p> <p>本遺跡の位置する涌津五輪堂地内は、過去に地名の由来にもなった国の重要指定文化財である鉄製五輪塔地輪が出土したと伝えられる場所である。今回の調査でも直接的関連は不明ながら中世に属する遺構(堀跡)や遺物(国産陶器)が検出されており、鉄製五輪塔が造立された時期に近接する時期の資料を追加することができた。</p>							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第582集

五輪堂遺跡発掘調査報告書

一般国道342号花泉バイパス道路改築事業関連遺跡発掘調査

印刷 平成23年1月25日

発行 平成23年1月31日

編集 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯綱11地割185番地
電話 (019) 638-9001

発行 岩手県南広域振興局土木部
〒023-1111 岩手県奥州市水沢区大手町1番2号
電話 (0197) 22-2881

(財)岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号
電話 (019) 654-2235

印刷 有限会社 博光出版
〒020-0122 岩手県盛岡市みたけ5丁目8番43号
電話 (019) 641-0671

